

長野県松本市

*IDEGAWAMINAMI*

# 出川南遺跡

—第15次発掘調査報告書—



2011. 3

松本市教育委員会

長野県松本市

*IDEGAWAMINAMI*

# 出川南遺跡

—第15次発掘調査報告書—

2011. 3

松本市教育委員会

# 例言

- 1 本書は、平成21年8月27日～平成22年1月28日に実施された、長野県松本市芳野179番126、179番127、179番128に所在する出川南遺跡第15次調査の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、長野県による県営住宅南松本団地建設事業（12号棟）に伴う緊急発掘調査であり、長野県より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆は、第Ⅲ章第3節1：直井、第Ⅲ章第3節2：石井、その他：福沢が行った。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。

遺物洗浄・注記 中澤温子、百瀬二三子、山口明子



遺物保存処理・接合復元 佐々木正子、竹平悦子、中澤温子、洞沢文江、山口明子

遺物実測・トレース・版組み （土器）竹内直美、竹平悦子、八坂千佳  
（金属製品）洞沢文江  
（石製品）石井佑樹

遺構図整理・トレース・版組み 村山牧枝

写真撮影 （遺構）石井佑樹、福沢佳典  
（遺物）宮嶋洋一

編集・総括：福沢佳典

- 5 竪穴住居址については出川南遺跡第1次調査から通して番号を付し、その他の遺構については本次調査で1号から番号を付している。
- 6 本書で用いた略記は次のとおりである。  
第○号住居址→○住、第○号土坑→○土、ピット○→P○  
また、単独のものは「P1」、住居址付属のものについては「P1」のように記し区別した。
- 7 図中で用いた方位記号は真北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅷ系に準拠した。また、標高・水平基準は東京湾平均海面水準（T.P.）である。
- 8 土層色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版 標準土色帖』に準拠している。
- 9 本書では以下のものをスクリーントーンで表した。  
遺構：焼土・被熱範囲   
遺物：黒色処理 
- 10 遺構図はS=1/80、詳細図はS=1/40で掲載した。遺物図は、土器：S=1/4、石製品および鉄製品：S=1/2またはS=3/4で掲載した。
- 11 遺構・遺物の記述で用いた古代の土器の種類・器種・時期区分等は、次の文献による。  
（財）長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内その1－総論編』
- 12 土器実測図において、断面白抜きは土師器・黒色土器、断面黒塗りは須恵器とした。
- 13 本調査における出土遺物および測量図・写真等の諸記録は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒399-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL.0263-86-4710 FAX.0263-86-9189）に保管・収蔵されている。

# 目次

---

例言

目次

第I章 調査の経緯	3
第1節 調査経過	
第2節 調査体制	
第II章 遺跡の環境	4
第1節 地理的環境	
1 出川南遺跡付近の地形・地質の概観	
2 発掘調査地点の地形・地質	
第2節 歴史的環境	
第3節 過去の調査	
第III章 調査成果	11
第1節 調査の方法	
第2節 遺構	
1 概要	
2 竪穴住居址	
3 上坑	
4 溝	
5 石積遺構 1	
第3節 遺物	
1 土器	
2 石製品	
3 鉄製品	
第IV章 総括	48

写真図版

報告書抄録

## 挿図目次

第1図	第15次調査区壁面の土層断面図 (S=1/80) . . . . .	5
第2図	調査地の位置と周辺遺跡 (S=1/25,000) . . . . .	6
第3図	過去の調査地点 (S=1/10,000) . . . . .	8
第4図	15次周辺の調査区 (S=1/2,500) . . . . .	9
第5図	調査区の位置 (S=1/1,000) . . . . .	10
第6図	遺構配置図 (S=1/400) . . . . .	12
第7図	遺構 (1) . . . . .	20
第8図	遺構 (2) . . . . .	21
第9図	遺構 (3) . . . . .	22
第10図	遺構 (4) . . . . .	23
第11図	遺構 (5) . . . . .	24
第12図	遺構 (6) . . . . .	25
第13図	遺構 (7) . . . . .	26
第14図	遺構 (8) . . . . .	27
第15図	遺物 (1) . . . . .	40
第16図	遺物 (2) . . . . .	41
第17図	遺物 (3) . . . . .	42
第18図	遺物 (4) . . . . .	43
第19図	遺物 (5) . . . . .	44
第20図	遺物 (6) . . . . .	45
第21図	遺物 (7) . . . . .	46
第22図	遺物 (8) . . . . .	47
第23図	遺構分布図 (古墳時代後期) . . . . .	50
第24図	遺構分布図 (奈良時代) . . . . .	51
第25図	遺構分布図 (平安時代前期) . . . . .	52

## 表目次

第1表	過去の調査一覧 . . . . .	9
第2表	竊穴住居址一覧 . . . . .	18
第3表	土坑・ピット一覧 . . . . .	18
第4表	溝一覧 . . . . .	19
第5表	土器観察表 . . . . .	35
第6表	石製品観察表 . . . . .	39
第7表	鉄製品観察表 . . . . .	39

# 第 I 章 調査の経緯

## 第 1 節 調査経過

出川南遺跡は松本市街地の南、双葉から芳野地区に広がる遺跡である。昭和 61 年に第 1 次発掘調査が行われて以来、これまで 14 回にわたる調査が実施されている。今回報告する第 15 次調査は、長野県住宅課による県営住宅南松本団地建設事業（12 号棟）に伴う緊急発掘調査である。平成 21 年 4 月 27 日付で、文化財保護法第 94 条に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書が長野県教育委員会に提出された。今回の事業地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である出川南遺跡に該当しており、事業地周辺においても緊急発掘調査が行われていることから、埋蔵文化財を包蔵していることが予想された。松本市教育委員会では、建設工事の際に遺跡が破壊される恐れがあるため、5 月 1 日に「出川南遺跡に関わる保護意見書」を長野県教育委員会教育長に提出し、5 月 18 日付で埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査実施の通知を受けた。その後、事業者である長野県住宅課と協議を行い、発掘調査及びこれに係る事務処理については松本市教育委員会が実施することとし、長野県と松本市の間に平成 21 年 8 月 4 日付で発掘調査業務の委託契約が締結された。

現地での発掘調査は平成 21 年 8 月 27 日～平成 22 年 1 月 28 日に実施した。調査終了後、平成 22 年 2 月 3 日付で長野県教育委員会に発掘調査終了報告書を提出した。また同日、埋蔵物発見届を松本警察署に提出し、平成 22 年 2 月 17 日付で長野県教育委員会教育長より埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属についての通知を受けた。それを受け、10 月 6 日に出土文化財譲与申請書を長野県教育委員会教育長に提出し、10 月 15 日出土文化財の譲与についての通知を受け、10 月 21 日付で出土文化財の受け入れを行った。

出土遺物及び測量図・写真等の調査記録の整理作業と本報告書の作成作業は、現場作業に引き続き松本市立考古博物館において行い、本書の刊行に至る。

## 第 2 節 調査体制

調査団長：伊藤 光（松本市教育長）

平成 21 年度（発掘調査）

調査担当者：福沢佳典、石井佑樹

発掘協力者：朝倉秀明、石川一男、今井太成、加藤朝夫、金井秀雄、猿楽あい子、清水陽子、曾根原裕、高山知行、茅野信彦、中嶋 健、中村 明、三谷久美子、宮澤昭敬、百瀬二三子、山田 茂

平成 22 年度（報告書刊行）

報告書作成：直井雅尚、福沢佳典、石井佑樹

調査員：宮嶋洋一

整理協力者：荒井留美子、柏原佳子、久根下三枝子、佐々木正子、竹内直美、竹平悦子、白鳥文彦、洞沢文江、前沢里江、百瀬二三子、村山牧枝、八坂千佳、山口明子

事務局：松本市教育委員会文化財課

小穴定利（課長 ～平成 22 年 3 月）、塩原明彦（同 平成 22 年 4 月～）

大竹永明（課長補佐 埋蔵文化財担当係長）、直井雅尚（主査）、

小山高志（主任 ～平成 22 年 3 月、主査 平成 22 年 4 月～）、柳澤希歩（副託）

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

#### 1 出川南遺跡付近の地形・地質の概観

出川南遺跡が立地する付近一帯は、古くは広い畑地で小麦・桑が栽培されていた。第2次世界大戦末の工場疎開による工業団地造成、南松本駅新設により、土地の削平、平坦化、客土が行われ、その様相を一変させた。戦後、食糧不足・食料増産のため土地造成が行われ広く水田化した。1963年の国道19号線の開通に伴い商業地及び宅地として市街地化が著しい。そのため現在、原地形の確認は困難である。

遺跡周辺の標高は593～598mで、東方約500mに田川、西方約2200mに奈良井川が北流するため、南から北に向かってわずかに低くなっていく。地形的には奈良井川扇状地と田川・牛伏川扇状地が接する合流扇状地の末端に位置しており、調査地の北東ないし北西方約500mには多くの湧水がみられ、特に北方の穴田川・頭無川沿いは沼沢性の沖積地である。調査地周辺でも地下水位は2.2～6.9mが報告されている。

過去の調査成果からは、基底礫層は奈良井川系統（古生層系統）で共通しており、調査地点によって上層の堆積層が田川・牛伏川系統と奈良井川系統に分けられる。これらの氾濫や乱流により複雑な堆積状況を呈し、砂礫層の間には雨水・小流により洗い出された砂質土・粘質土の間層が形成され、遺跡が立地する面となる。出川南遺跡第1・6・8次調査地点では弥生時代後期～古墳時代中期、古墳時代後期～平安時代の上下2面の遺構面が確認されている。

#### 2 発掘調査地点の地形・地質

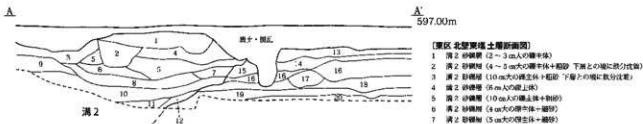
今回の発掘調査地点は松本市芳野179番126ほかにあり、県営住宅南松本団地の敷地内である。第14次調査地点の北に位置する。付近の標高は596.8m前後である。調査開始時は、旧県営住宅B4～B7棟解体後の更地となっており、現地表面では微地形は確認できない。上述のように、調査区周辺は複雑な堆積状況であるが、調査区壁面の土層断面図（第1図）および遺構断面図の観察から調査区の土層堆積状況は述べる。

全ての地区において攪乱が激しく、東区は概ね現地表面から約0.5mまで現代の表土・攪乱層である。深いところでは約1.4mまで達し遺構を破壊している。調査当初、東区北壁の東端付近を基本土層として土層の観察を行っていたが、石積遺構1検出後、その他の地点とは土層が異なることが判明した。攪乱の下、地表面から約1.2mまでは1～10cm大の礫が混入する黄褐色～暗灰黄色砂質土層が堆積する。これらは遺物を含まないが、同じく石積1の内側の堆積を表す東壁中央（第13図）では確認できず、溝2より西側でも確認できないため石積1に関連する土層の可能性はある。18層より下は自然堆積層と考えられる。

東区は概ね地表面から約0.7～0.8m下の暗オリーブ褐色砂質土層を遺構検出面とした。それより下層は粘質土層をはさんで細砂層となる。遺構断面土層などの観察によると、わずかに西に向かってこれらの層は高くなっていくようである。そのため、東区の検出面の土相は溝3付近から東西で様相が異なり、西側では黒褐色弱粘質土層（溝3付近断面図の2層）または、暗灰黄色弱粘質土層（同5層）が遺構面となっている。鉄分を多く含むためか東側の19層に比べて暗くなる。

西区も現地表面から約0.5mまで表土・攪乱層である。東区同様に深いところでは約1.4mまで達している。攪乱層の下に灰～灰オリーブ色弱粘質土層をはさみ、褐色鉄分が多量混入する黄灰～暗灰黄色弱粘質土層（5層）が堆積する。5層の上面を遺構検出面とした。地表面から約0.7mである。約0.9m下から砂質土層（12層）が堆積し、約1.0mから下は砂礫層（15層）に変わるようである。また、奈良・平安時代遺構面の一層下の暗灰黄色弱粘質土層（7層）の上面で372住および27土といった古墳時代後期の遺構が検出されたため、古墳時代の遺構面とした。なお、3層から掘り込まれる遺構もあるが、近世陶磁器が出土している。

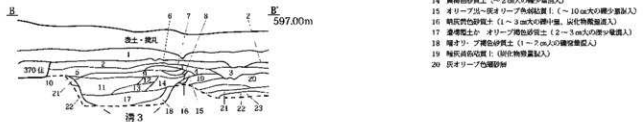
東区北壁東端土層断面図



【東区北壁東端土層断面図】

- 1 溝2 砂礫層 (2~3 cmの礫半体)
- 2 溝2 砂礫層 (4~5 cmの礫半体+粗砂 下層との間に微分状質)
- 3 溝2 砂礫層 (10 cm次の礫半体+粗砂 下層との間に微分状質)
- 4 溝2 砂礫層 (5 cm次の礫半体)
- 5 溝2 砂礫層 (10 cm次の礫半体+粗砂)
- 6 溝2 砂礫層 (4 cm次の礫半体+粗砂)
- 7 溝2 砂礫層 (5 cm次の礫半体+粗砂)
- 8 溝2 砂礫層 (2~4 cm次の礫半体+粗砂)
- 9 溝2 砂礫層 (3~4 cm次の礫半体+粗砂)
- 10 溝2 砂礫層 (1~2 cm次の礫半体+粗砂)
- 11 溝2 砂礫層 (1~2 cm次の礫半体+粗砂)
- 12 溝2 砂礫層 (5~10 cm次の礫半体+粗砂)
- 13 溝2 砂礫層 (5~10 cm次の礫半体+粗砂)
- 14 溝2 砂礫層 (5~10 cm次の礫半体+粗砂)
- 15 溝2 砂礫層 (5~10 cm次の礫半体+粗砂)
- 16 溝2 砂礫層 (5~10 cm次の礫半体+粗砂)
- 17 溝2 砂礫層 (5~10 cm次の礫半体+粗砂)
- 18 溝2 砂礫層 (5~10 cm次の礫半体+粗砂)
- 19 溝2 砂礫層 (5~10 cm次の礫半体+粗砂)
- 20 溝2 砂礫層 (5~10 cm次の礫半体+粗砂)

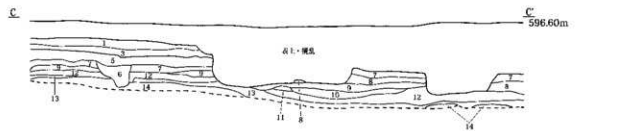
東区北壁溝3付近土層断面図



【東区北壁溝3付近土層断面図】

- 1 埋り土 (埋り土)
- 2 埋り土 (埋り土)
- 3 埋り土 (埋り土)
- 4 埋り土 (埋り土)
- 5 埋り土 (埋り土)
- 6 溝3 砂礫層 (4 cm次の礫半体)
- 7 溝3 砂礫層 (4 cm次の礫半体)
- 8 溝3 砂礫層 (4 cm次の礫半体)
- 9 溝3 砂礫層 (4 cm次の礫半体)
- 10 溝3 砂礫層 (4 cm次の礫半体)
- 11 溝3 砂礫層 (4 cm次の礫半体)
- 12 溝3 砂礫層 (2 cm次の礫半体)
- 13 溝3 砂礫層 (1.5 cm次の礫半体)
- 14 溝3 砂礫層 (8 cm次の礫半体)
- 15 溝3 砂礫層 (8 cm次の礫半体)
- 16 溝3 砂礫層 (高材土層)
- 17 溝3 砂礫層 (4 cm次の礫半体)
- 18 溝3 砂礫層 (1 cm次の礫半体 砂礫半体)
- 19 埋り土 (埋り土)
- 20 埋り土 (埋り土)
- 21 埋り土 (埋り土)
- 22 埋り土 (埋り土)
- 23 埋り土 (埋り土)

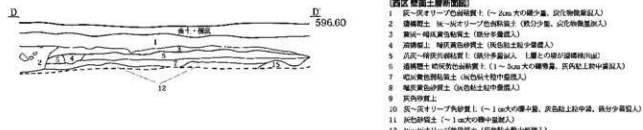
西区西壁南端土層断面図



【西区西壁南端土層断面図】

- 1 灰~灰オリソープ色砂礫質土 (1~2 cm次の礫半体、炭化物微量混入)
- 2 埋り土 (埋り土)
- 3 埋り土 (埋り土)
- 4 埋り土 (埋り土)
- 5 埋り土 (埋り土)
- 6 埋り土 (埋り土)
- 7 埋り土 (埋り土)
- 8 埋り土 (埋り土)
- 9 埋り土 (埋り土)
- 10 灰~灰オリソープ色砂礫質土 (1 cm次の礫半体、炭化物微量混入)
- 11 灰~灰オリソープ色砂礫質土 (1 cm次の礫半体)
- 12 灰~灰オリソープ色砂礫質土 (灰色粘土粒少量混入)
- 13 灰~灰オリソープ色砂礫質土 (灰色粘土粒少量混入)
- 14 砂礫層 (粗砂多量混入)
- 15 砂礫層 (粗砂多量混入)

西区南壁東端土層断面図

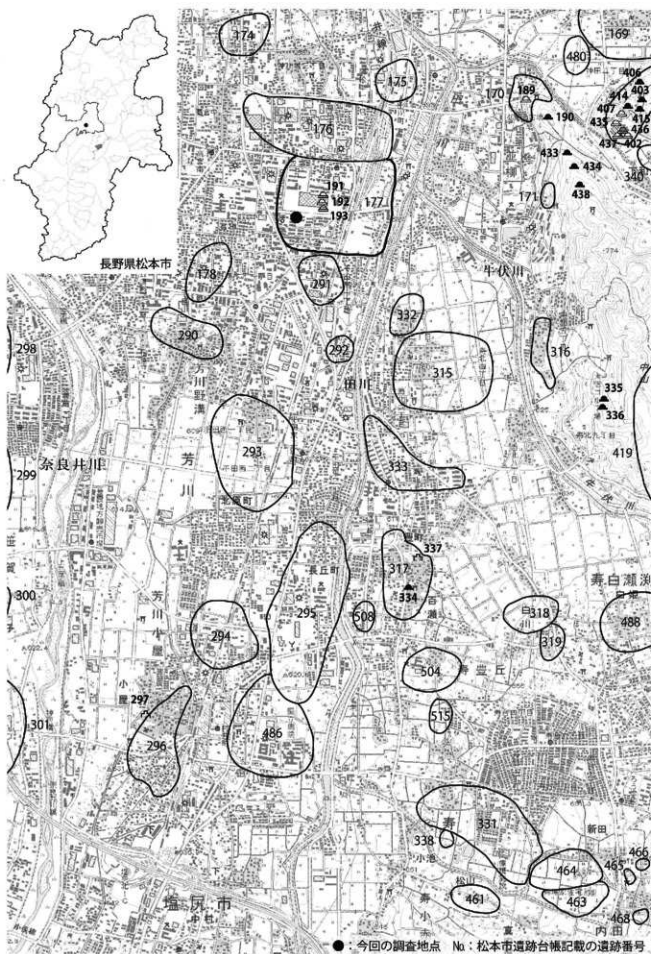


【西区南壁東端土層断面図】

- 1 灰~灰オリソープ色砂礫質土 (1~2 cm次の礫半体、炭化物微量混入)
- 2 埋り土 (埋り土)
- 3 埋り土 (埋り土)
- 4 埋り土 (埋り土)
- 5 埋り土 (埋り土)
- 6 埋り土 (埋り土)
- 7 埋り土 (埋り土)
- 8 埋り土 (埋り土)
- 9 埋り土 (埋り土)
- 10 灰~灰オリソープ色砂礫質土 (1 cm次の礫半体、炭化物微量混入)
- 11 灰~灰オリソープ色砂礫質土 (1 cm次の礫半体)
- 12 灰~灰オリソープ色砂礫質土 (灰色粘土粒少量混入)
- 13 灰~灰オリソープ色砂礫質土 (灰色粘土粒少量混入)
- 14 砂礫層 (粗砂多量混入)
- 15 砂礫層 (粗砂多量混入)

第1図 第15次調査区壁面の土層断面図 (S=1/80)





第2図 調査地の位置と周辺遺跡(S=1/25,000)

## 遺跡地図掲載遺跡

- 遺跡名：169 神田 170 平畑 171 山行法師 174 高宮 175 出川 176 出川西 177 出川南 178 五輪 290  
291 平田北 292 平田 293 平田本郷 294 小原 295 高畑 296 小屋 298 下二子 299 中二子  
300 上二子 301 神戸 315 竹測 316 瀬黒 317 百瀬 318 白川 319 野田 331 小池 332 竹測南原  
333 向原 340 生妻 461 松山 463 エリ穴 464 一ツ家 465 くねの内 466 八幡原 468 長泉寺  
480 神田西 486 村井 488 白姫 508 寿南久保 504 百瀬南 515 北起こし
- 古墳名：189 平畑1号 191 平田里1号 192 平田里2号 193 平田里3号  
419 中山古墳群 190 弘法山(中山48号) 402 中山31号 403 中山32号 406 中山35号  
407 中山36号(仁徳岡山) 414 中山58号 415 中山59号 433 中山北尾根1号 434 中山北尾根2号  
435 檜護山1号 436 檜護山2号 437 檜護山3号 438 中山北尾根3号  
334 耳塚 335 長峰下1号 336 長峰下2号
- 城館址：297 小屋城址 337 百瀬の陣屋 338 小池砦址

## 第2節 歴史的環境

本遺跡周辺には数多くの遺跡が立地し、田川右岸、田川と奈良井川間に挟まれた地域、奈良井川左岸の大きく3つの遺跡群に分けられる。

縄文時代は、山川・奈良井川間の地域では現在、遺構・遺物は確認されておらず、田川右岸および奈良井川西岸では遺跡が確認されている。特に田川右岸の山寄りの地域では、百瀬遺跡第2次調査で早期の押型紋土器と若干の上坑が確認されている。その後、小池、一ツ家遺跡は中期、エリ穴遺跡は晩期に多量の耳飾りが出土する大規模集落が営まれている。

弥生時代中期以降になると、百瀬、竹測、竹測南原遺跡で規模の大きな集落が営まれる。中でも百瀬遺跡は、弥生時代中期末の百瀬式の標識遺跡として重要である。田川・奈良井川間の地域においても中期前葉～中葉に出川、出川西、平田北遺跡で遺構が確認されており、この地域の開発の初源といえる。後半になると、出川南遺跡でも住居址や遺物が確認され始め、墓域が形成されていた可能性もある。

古墳時代前期には、高宮遺跡で弥生時代後期後葉の筒清水式の名残を残すような甕や、東海系のパレス葺が出土しており、出川南遺跡でも東海系の古墳前期の土器や住居址が確認されている。東方約1.5kmの中山丘陵突端には前期の前方後方墳である弘法山古墳が築かれており、この地域一帯が造営集団の主力と考えられるが、いまだまとまった集落は見えてきていない。

中期になると、出川西遺跡で住居址2軒、配石遺構が7基、土器集中地点が19カ所確認されている。北東に位置する高宮遺跡でも土器集中地点が15カ所確認されている。ミニチュア土器や下類、模造石製品、鉄飯・鉄剣などが出土しており、これらはほとんど掘り込みを持たないような浅い凹地状地形の縁や底面に置かれている。また、土器群によっては高杯のみで構成されており、廃棄跡ではなく祭祀遺構と考えられる。該期の住居址も3軒確認されているが、この一帯が祭域として使用されていた段階があるようである。また、出川南遺跡第4次調査地点では平田里古墳群(1～3号古墳)の円墳3基が調査されている。1号古墳は5世紀後半～6世紀初頭と考えられ、周溝から出土した多量の円筒埴輪・形象埴輪と馬具類は県内でも貴重な資料である。後期は、出川南遺跡で大規模な集落が営まれ、松木市内でも最大規模の集落跡である。

奈良時代になると、出川南遺跡の南側から平田北遺跡にかけて集落が展開する。古墳時代後期に比べると規模が縮小しているようであり、平安時代前期以降になると、出川南、平田本郷遺跡、さらに南では小原、吉田川西遺跡など拠点的な集落が拡散・立地し始める。これらは交通の要衝に位置するようになったためと考えられ、中世に続く集落も存在する。

### 第3節 過去の調査

木遺跡はこれまでに14次の発掘調査が実施されている。各調査地点の位置を第3・4図に、調査成果の概要を第1表に示した。

第1次調査は昭和61年に行われ、南北2地区で弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居址が2軒、平安時代の竪穴住居址が3軒確認されている。弥生時代後期前半に属する第4号住居址では、磨製石鎌3点、未製品8点および砥石などが出土しており、豊饒に準大の籾が多く出土していることから、小工房的な性格も推測されている。また、竪穴状遺構3は溝を伴う土坑であり、溝中から遺物が集中して出土した。遺物は土師器の器台、壺の他に赤色塗彩された高杯、壺、甕などがあり、方形周溝墓の可能性もある。平安時代後期に属する第3号住居址では浮岩製の浮子が1点出土している。出川西遺跡でも平安時代の住居址から土鎌が約20点出土しており、田川を漁場としていたとも推測できる。

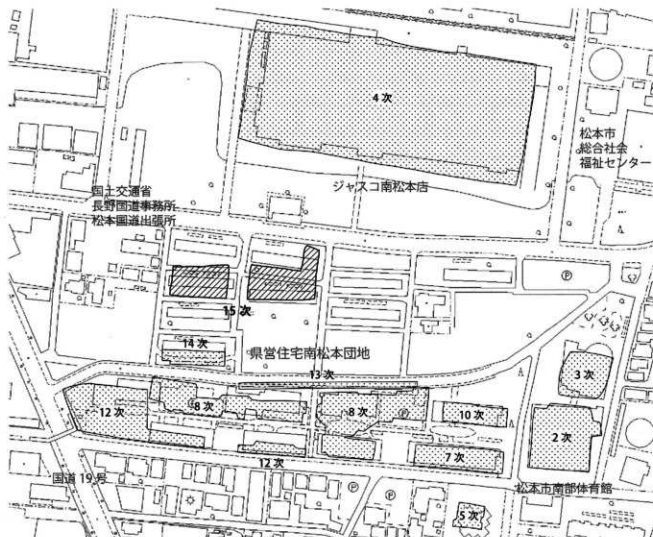
平成3年に行われた第4次調査では、古墳時代後半から平安時代後半にかけて116軒の竪穴住居址が確認されている。古墳時代後期の住居址は113軒で、6世紀後半～7世紀後半まで4段階の変遷を迫ることができる。付近一帯に比較的規模の大きな集落が展開していることが明らかになっている。竪立柱建物址21棟も古墳時代後期に属するもので、数軒の竪穴住居址とセットになりひとつの単位を構成していると考えられる。

また、調査区東端では平田里1～3号古墳(第2図191～193)が確認された。これらは中期後半～末に築造されたものと考えられ、周溝からは埴輪をはじめ周溝内祭祀に使用された遺物が多数出土している。特に1号古墳は平地に築造された松本平の古墳の中では最大規模のものである。5世紀後半以降の首長墓の展開を考えていく上で重要な資料と位置づけられる。

今回の15次調査地点周辺では、第4次調査を含め10次にわたる発掘調査が行われている。古墳時代後期～平安時代後期までの竪穴住居址253軒、竪立柱建物址25棟、土坑401基、自然流路を含む溝24条などが確認されている。また、第8・12次調査では緑軸陶器の生地、第5次調査でも美濃須衛潔、尾北窯産など東海系の須恵器蓋・杯や、畿内系暗文杯などの搬入品も一定量見られる。古墳時代中期の平田里古墳群と同時期の住居址はまだ確認できていないが、古墳時代後半の大規模な集落から平安時代後期にかけて存続した集落として、松本市域でも重要な遺跡であることが明らかになっている。



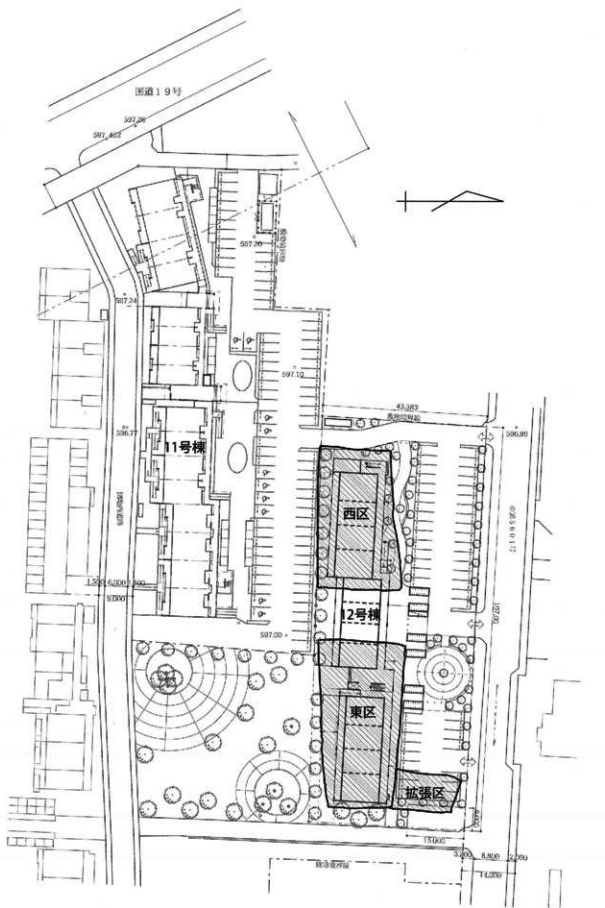
第3図 過去の調査地点 (S=1 / 10,000)



第4図 15次周辺の調査区 (S=1 / 2,500)

第1表 過去の調査一覧

調査年度	実施年度	面積	調査成果	備考
1	昭和61年 (1986)	1325㎡	住居址5(弥生後期1、古墳前期1、平安前期1、平安後期2) 竪穴状遺構3、掘立柱建物址1、土坑1、溝4	遺構跡2面。上が平安、下が弥生後期～古墳前期。
2	昭和63年 (1988)	1715㎡	住居址1(古墳後期) 土坑26、ピット61、溝1	
3	平成元年 (1989)	900㎡	住居址6(古墳後期～平安前期)	
4	平成3年 (1989)	14688㎡	住居址116(古墳後期113、平安前期2、平安後期1) 掘立柱建物址21、柱列2、土坑7、ピット多数、溝11	平田里1～3号古墳(中期古墳)も調査。
5	平成10年 (1998)	281㎡	住居址11(古墳後期2、平安前期5) 土坑6、ピット11	
6	平成10年 (1998)	1486㎡	住居址4(弥生後期前半3、古墳後期1) 竪穴状遺構2、掘立柱建物址3、土坑3、ピット55、溝6	遺構跡出面2面。上が古墳後期以降、下が弥生後期。
7	平成10年 (1998)	867㎡	住居址50(古墳後期～奈良11、平安前期39)、掘立柱建物址1土坑175、ピット13、溝2、遺物集中2(古墳前期)	
8	平成11年 (1999)	3293㎡	住居址48(古墳後期7、奈良8、平安前期14)、掘立柱建物址1、土坑144、溝1、遺物集中2(古墳中期)、自然流路2	遺構跡出面2面。上が古墳後期以降、下が古墳時代中期。
9	平成11年 (1999)	240㎡	住居址2(古墳後期) 土坑4、ピット7、遺物集中2(古墳前期)	
10	平成11年 (1999)	560㎡	住居址4(平安前期) ピット5、溝1	
11	平成13年 (2001)	188㎡	住居址3(弥生後期1、平安中～後期2) 土坑7(火葬施設1)、ピット232、溝1、自然流路2	遺構跡出面3面。上が平安後期～中世、下が古墳時代中期、下が弥生時代後期。
12	平成13年 (2001)	2197㎡	住居址13(古墳後期2、奈良8、平安前期2)、土坑34、ピット70、溝1	
13	平成14年 (2002)	25㎡	住居址2(時期不明2)	トレンチ調査。
14	平成19年 (2007)	383㎡	住居址2(古墳後期2)、掘立柱建物址2、土坑9 ピット11、溝穴遺構5	



※ 県営住宅南松本団地12号棟新築工事 配置計画図に調査区を重ね合わせた

第5図 調査区の位置 (S=1/1,000)

## 第三章 調査成果

### 第1節 調査の方法

**調査区の設定** 調査開始時に、調査地の南側隣接地において県営住宅南松本団地 11 号棟建設工事が行われていたため、調査予定地のほぼ中央に機材搬入路が設けられていた。そのため、搬入路の東西で 2 地区の調査区を設定し、東区から調査を開始した。掘削範囲は県営住宅 12 号棟建設工事により掘削される範囲より約 2 m 広く設定した。

また、東区の北東隅で検出された石積遺構が調査区外に続くと思われたため、範囲・規模を確認するために、県営住宅 12 号棟の範囲外であるが拡張区を設定、確認調査を行った。

調査面積は、東区 904.4 m<sup>2</sup>、西区 768.6 m<sup>2</sup>、拡張区 165.8 m<sup>2</sup>の合計 1838.8 m<sup>2</sup>である。

各区の発掘調査期間は以下のとおりである。

東区：平成 21 年 8 月 27 日～平成 21 年 11 月 28 日

西区：平成 21 年 12 月 2 日～平成 22 年 1 月 26 日

拡張区：平成 22 年 1 月 8 日～平成 22 年 1 月 28 日

**発掘手順** 大型建設用機械バックホウにより東区南縁に沿ってトレンチを設定し掘削、土層の堆積状況を確認した。その結果、地表下約 0.7～0.8 m を遺構検出面とし、面的な掘り下げを行った。その後人力により遺構検出を行い、写真撮影・図面記録後に掘削調査を行った。遺構番号は、調査時には遺構の種類・調査区を問わず通し番号を付し、整理時に遺構の種類ごとに番号を付した。竪穴住居址は出川南遺跡第 1 次調査からの通し番号を付し、その他の遺構は今回の調査で 1 号から通し番号を付した。

東区調査終了後、西区も同様に南・西縁に沿ってトレンチを掘削し、地表下約 0.7 m を遺構検出面とし面的な掘り下げを行った。

各遺構の調査終了後、調査区ごとに完掘状況の全景写真を撮影し、バックホウにより埋め戻し作業を終了した。

**測量** 調査地に近接する用地・工事測量用に設定された測量用基準鈎から調査地内に世界測地系平面直角座標・標高を移設し、基準点とした。平面図はこれをもとに、簡易置り方測量により作成し、部分的に光波測距儀を併用した。平面図・断面図は原則  $S=1/20$  で作成し、詳細図が必要なものは  $S=1/10$  で作成した。

出土遺物のうち遺構の覆上層のものは、住居址のような大きな遺構は 4 分割した区画ごとなど、出土位置が把握できるように一括で取り上げ、下層および床面直上上のものは詳細出土状況図を作成し、標高を記録し取り上げた。

**写真記録** 調査区全景、土層・遺構の状況、遺物出土状況等は、35 mm 一眼レフカメラ（リバーサル、白黒フィルム）とデジタルカメラで撮影した。調査区全景については、ローリングタワー 6 m を使用し撮影を行った。

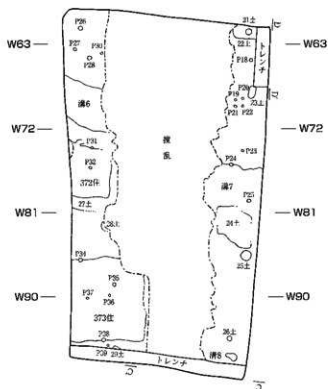
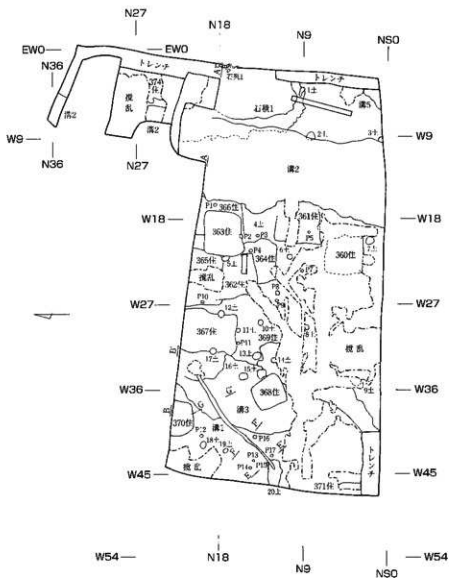
**整理作業** 発掘作業に並行して写真・図面等の整理を行った。図面類は平面図・土層断面図の点検・照合を行い、報告書に掲載するものについてはトレース作業を行った。遺物は洗浄・クリーニング後、接合作業を行い、遺存度の良好なものの特徴的な遺物について実測・トレースを行った。

**調査成果** 発掘と整理作業の結果、以下の遺構が確認された。その概要は、第 2～4 表および巻末の発掘調査報告書抄録に掲載している。

東区：竪穴住居址 12 軒、土坑 20 基、ピット 17 基、溝 5 条（自然流路 4 含む）、石積遺構 1 基

西区：竪穴住居址 1 軒、土坑 9 基、ピット 22 基、溝 3 条（自然流路 1 含む）、集石 1 基

拡張区：竪穴住居址 1 軒（東区から続く溝 1 条、石積遺構 1 基）



第6図 遺構配置図 (S=1/400)

## 第2節 遺構

### 1 概要

今回の調査では、古墳時代後期から平安時代前期の竪穴住居址を15軒確認した。古墳時代後期が2軒(371・372住)、奈良時代が4軒(368～370・373住)、奈良時代末～平安時代前期が9軒(360～367・374住)である。東区に集中し、遺構の重複からも今回の調査地から北東にかけて集落が広がっていたことが明らかである。溝8条のうち、確実に人為的なものは溝1であり、溝6・7も人為の可能性がある。その他は砂礫層主体の覆土であり、自然流路と考えられる。過去の調査においても自然流路が確認されており、付近一帯は氾濫原で洪水時の痕跡が地表下に残っている。土坑・ピットは遺物の出土が少なく、性格を明らかにできるものは少ない。また、掘立柱建物を構成するものもなかった。今回の調査で検出した竪穴住居址は掘り方内部に柱穴を確認できなかったものが多い。土層断面で明確な柱痕を確認できなかったが、住居址に近接するものは住居付属のものであるかもしれない。

### 2 竪穴住居址

#### (1) 第360号住居址

東区の南東に位置する。旧県営住宅の基礎等で攪乱され、検出面では南辺のプランしか確認できなかった。そのため、攪乱を除去し検出面より約0.2m下で北・西辺のプランを確認した。

カマドは西壁中央に位置する。掘削中も被熱礫はほとんど出土しなかったが、左袖部に元位置を保った状態の被熱礫が出土しており、石組カマドと推測される。また、東壁中央にも被熱面が検出されたが、360住の覆土中にあることから、別の住居址のカマドの可能性が高い(焼上1)。住居内ピット、貼床は確認できない。

出土遺物の総量は1,826gである。全体的に遺物の出土はまばらであるが、カマドが位置する西半の覆土から最も多く出土している。床面およびカマド内からの出土は少ない。

#### (2) 第361号住居址

東区の南東、360住の北東に位置する。旧県営住宅に攪乱され、P5に切られる。また、東側は溝2に切れ、壁は残っていない。

カマドは東側、溝2の堆積層の下より検出した。被熱面を中心に被熱礫が散在し、周囲には焼土・炭化物粒が集中分布する。石組カマドと考えられる。また、カマド脇からは完形の須恵器杯A(第15図11)が伏せた状態で出土している。住居内ピットはなく、貼床も確認できない。

出土遺物の総量は2,642gである。カマドの周辺に集中して出土し、北西隅の覆土上層から完形の黒色土器杯A(第15図6)が出土している。

#### (3) 第362号住居址

東区の中央北寄りに位置する。本址は5軒重複する中のひとつである。平面プランが不明瞭であったため、3×3mのグリッドを設定しレベルを残して検出面を下げた。また、部分的にトレンチを入れ、土層断面の検討を行い、切り合い関係を判断した。そのため、住居址の軸を通る断面図を作成することはできなかった。また、北辺・東辺は掘削手順の誤りもあり平面プランを掴むことができなかった。

土層断面の検討の結果、363・364住を切る。北に位置する365住も本址と重複すると考えられ、出土遺物から本址が新しい。

カマドは北壁中央のやや西寄りに位置する。構築礫が組まれた状態で検出され、遺存状態は良い。カマド左袖部は扁平な重鉛礫を3段階積み、その他は長楕円形の礫を用いている。また、奥壁寄りには扁平な石を用いて天井部を構築している。奥壁は攪乱されているが、構築材の残存長で長さ0.95m、幅0.75mである。カマド内の焼十面からは完形の土師器小型甕(第16図49)が伏せた状態で出土している。

住居内遺構はP1、P2があるが、いずれも深さ0.05～0.10mと浅く、柱穴とは考えにくい。カマド脇の付属ピ



ットと考えられる。北東隅は、床面より0.16~0.25m高く、テラス状になっていた可能性が高い。貼床は確認できない。

出土遺物の総量は11,812gである。カマドから南西部に集中し、中~下層から遺存状態の良い土器片が多量出土した。これらの出土遺物から古代土器編年の7期、9世紀第3四半期に帰属するものと考えられる。また、西端から須恵器杯A(第15図46)が出土している。4~5期に属するもので、混入品と考えられる。

#### (4) 第363号住居址

東区の中央北寄りに位置する。362住、5土、P2に切られ、364~366住を切る。

カマドは東壁中央に位置する。カマド脇のP3から被熱礫が多量に出土しているため、石組カマドであろう。

住居内遺構は3基のピットが南西隅を除く三隅に位置する。P1は深さ0.30m、P3は深さ0.23mであるが、P2は深さ0.05mほどの浅いくぼみである。上述のとおりP3にはカマド構築礫が廃棄されている。貼床は確認できない。

出土遺物の総量は3,476gである。床面近くの遺物は少なく、カマド周辺に集中する。

#### (5) 第364号住居址

東区の中央北寄りに位置する。362・363住、4土、P4に切られる。

カマドは東西2ヶ所で確認された。西側のカマドは石組カマドである。西壁の中央やや北寄りに位置し、多量の被熱礫が検出され、当初は元位置を保っているものと考えられた。しかし、調査の結果、被熱面より浮いた状態であったため、破棄された痕跡である。0.12×0.11m、深さ0.08mの浅いくぼみで、底面の奥側に被熱面を確認した。東側のカマドは、東壁の中央やや南寄りに位置する。西カマド同様に、0.75×0.95m、深さ0.10mほど掘りくぼみ、焚口側の底面に被熱面を確認した。また、奥壁に向かって浅い溝がのび、礫が据えられている。また、右袖部に構築礫が1点残存している。ともに同一面での検出であるが、遺存状況から東壁のカマドが古く、西壁のカマドに作り替えたものと考えられる。

住居内遺構はピットが3基ある。P1・2は位置関係から柱穴の可能性はあるが、いずれも0.10~0.17mと浅い。P3はカマド付属のピットである。貼床は確認できない。

出土遺物の総量は3,855gである。西側の新カマド周辺が多い。特筆すべきものでは、南西隅から黒書された黒色土器杯A(第16図71)が出土している。

#### (6) 第365号住居址

東区の中央北寄りに位置する。362・363住、P10に切られる。

カマドは確認できなかったが、コンクリート攪乱の西側で10~30cm大の礫が集中して検出された。被熱は確認できなかったが、住居廃絶時に廃棄されたものであろう。住居内遺構はP1がある。0.5×0.45m、深さは0.18mである。貼床は確認できない。

出土遺物の総量は2,074gである。コンクリート攪乱の周囲や礫集中に混じって、須恵器甕や土師器甕の大きめの破片が多量出土している。食膳具の出土は少ない。

#### (7) 第366号住居址

東区の中央北寄りに位置し、調査区外の北に続く。363住、P1・2、溝2に切られる。363住のプラン確認のため、調査区北壁にトレンチを掘削し本址の立ち上がりを確認した。時間的制約から完掘することができなかったため、住居の全容および出土遺物について不明点が多い。検出プランであるが、規模は残存4.8×推定4.4m、深さは0.65mで、方形を呈すると考えられる。

362住の南壁面に焼土層が広がるため、トレンチを掘削したところ南側に被熱面を確認した。位置関係から本址のカマドの可能性はある。被熱礫は検出されなかった。

遺物は調査区北壁トレンチと焼土確認トレンチからのみであるが、総量418gである。

#### (8) 第367号住居址

調査区中央北寄りに位置し、調査区外の北に続く。12・17土に切られる。北半は0.5cmほどの小礫が少量混入するが、カマドがある南半は礫の混入がほとんどない。貼床は確認できないが、南半は暗灰黄砂質土を床面とし、硬化面が確認された。中央部分は浅いくぼみ状になっており、周囲より約0.20m低い。その結果、西と南部分はテラス状に一段高くなっている。また、東壁の北半にもテラスがあり、上面には厚さ約0.10mの焼土層が堆積していた。

カマドは南西隅に位置し、周囲から被熱礫の出土はなかった。住居内遺構はピットが7基確認された。P1・2・5は深さ0.30～0.35mで柱穴の可能性がある。P3・4・6は中央のくぼみに位置する。また、P6の近くにも焼土の堆積が確認された。

出土遺物の総量は4,594gである。床面直上の遺物はカマドの周囲が多く、土師器が多い。

#### (9) 第368号住居址

東区の西寄り中央に位置し、他の住居址とは軸方向がやや異なる。369住、溝3を切る。

カマドは北東隅の中央に検出された。被熱礫はほとんど検出されず、約0.1mほど浅く掘りくぼめ、焼寄りに被熱面を確認した。住居内遺構は確認できず、貼床も確認できない。

出土遺物の総量は2,232gである。カマドが位置する北東側が多く、佐波埋鉢を模倣したと考えられる黒色土器Aの鉢(第18図108)が出土している。

#### (10) 第369号住居址

東区の西よりの中央で検出された。368住、13・14・15上、溝3に切られ、南半分は旧県営住宅に大きく攪乱されている。南半の攪乱除去後、わずかに残存するプランを検出し、規模は4.9×推定4.1m、深さ0.42mで、平面形は不整形と推測される。

カマドは北隅中央に位置し、被熱礫がわずかに出土しているため石組カマドと推測される。住居内遺構はなく、貼床も確認できない。

出土遺物の総量は3,650gである。カマド周辺から土師器が多く出土しており、北東隅より残りの良い須恵器杯B(第18図123・125)が出土している。

#### (11) 第370号住居址

東区の北西に位置する。調査区外の北に続くが、規模は3.8×残存2.4m、深さ0.35mで、平面形は隅丸方形と推測される。

カマドは東壁の南隅寄りに位置する。左袖部に被熱礫が残存しており、石組カマドである。住居内遺構はなく、貼床も確認できない。

出土遺物の総量は3,810gである。覆土からの出土は少なく、カマド周辺から須恵器甕・瓶類(第18図137～139)が多量出土している。

#### (12) 第371号住居址

東区の南西隅に位置する。大部分を攪乱され、西辺の一部を残すのみである。規模・平面形ともに不明である。また深さも0.2mと遺存状態が良くない。

カマドは西壁に位置し、周囲に焼土・炭化物粒が散る。被熱礫は確認できなかった。住居内遺構は不明で、貼床も確認できない。

出土遺物の総量は1,502gである。カマド周辺から土師器甕と須恵器甕が出土している。

#### (13) 第372号住居址

西区の中央北に位置する。平安時代検出面の一層下の灰黄色弱粘質土層で検出した。P32に切られ、27土を切る。調査区外北に続くが、規模5.3×残存4.2m、深さ0.55mで、平面形は方形と推測される。

カマドは東壁のやや北寄りに位置する。東壁から離れて被熱面があり、そこから壁外に向かって幅0.30m、残存長1.6mの煙道が良好に残存する。煙道の奥側には10cm大前後の礫を詰めた状態で出土した。住居内遺構はなく、貼床も確認できない。壁際は中央部に比べ約0.30～0.40m高く、幅0.10～0.55mほどのテラス状となっている。

出土遺物の総量は5,108gで、カマド周辺が多い。

#### (14) 第373号住居址

西区北西に位置する。P35～38に切られる。調査区外北に続くが、規模は8.8×残存8.0m、深さは0.52mの大型住居である。

明確なカマドは確認できない。東壁中央に焼土・炭化物粒が散る箇所があるが、被熱礫は確認できなかった。

住居内遺構はピットが11基ある。壁寄りに位置するが配置に規則性はみられず、深さも0.10～0.35mと差がある。また、断面からも明確な柱痕は確認できなかった。貼床も確認できない。

出土遺物の総量は22,574gである。覆土中層からも完形に近い遺物が多い。また、床面直上、特に南西部は、炭化物粒を多量混入する弱粘質土層が堆積し、その下から細片の遺物が多量出土した。美濃須衛産の須恵器が多く出土し、特に杯B・蓋が多い。また、床面から刀子2点が出土している。

#### (15) 第374号住居址

拡張区の中央に検出された。北と南を攪乱され、東側は拡張区南北トレンチにかかるため、西側の一部しか残存していない。また、時間的制約から遺物の取り上げおよびカマド周辺の掘削のみにとどまってしまった。そのため、検出プランからであるが、規模は残存5.2m×残存5.5mで、西壁で深さは0.15mある。平面形は不明である。

カマドは西壁に位置し、周囲に被熱礫が検出されたため石組カマドであろう。住居内遺構は不明である。

遺物は、一部分のみの調査であるため全体を表すものではないが、総量2,022gを得ている。

### 3 土坑

土坑は東区で20基、西区で9基の合計29基検出した。攪乱されるものも多く、全容を把握できるものは少ない。また、東区の4・9土、西区の24・27土は明確なプランやカマドを確認できず、住居址とは判断できなかったものである。遺物が一定量出しており推定規模からも他の土坑とは異なる。以下、特徴的な土坑について記述する。

#### (1) 第4号土坑

東区の中央北寄りに位置する。検出面でプランを確認し、グリッドを設定し掘り下げたが明確なプランは確認できなかった。東側は溝2に切られ、隣接する361住も土層断面観察用のベルトからは本土坑の覆土は確認できず、本遺構を切っている。西に位置する364住を切るものと考えられる。出土遺物の総量894gである。黒色土器入杯や須恵器杯Aが出土している。

#### (2) 第9号土坑

東区の中央南に位置する。遺構の大部分を攪乱され、西側の立ち上がりしか確認できない。下層覆土にわずかに焼土粒が混入する。遺物は総量1,456gで、西側に集中して出土した。

#### (3) 第24号土坑

西区の中央南に位置する。土坑としたが、平面および断面でも明確な立ち上がりはなく、唯一西側の立ち上がりのみを確認できた。後述する溝6・7と重複するものと考えられ、平面プランも不明確である。覆土は鉄分が多く混入する灰オリブ砂質土層で、下層になるにつれて砂の混入が多くなる。出土遺物は総量956gと少ないが、完形の須恵器杯A(第21図233)が出土している。

#### (4) 第27号土坑

西区の中央北に位置する。372住同様に平安時代検出面の一層下の暗灰黄色弱粘質土で検出した。372住に切られるが、372住の下にわずかに本土坑の覆土が残存している。また、372住の西外側で礫の集中と焼土粒の分布が

確認されたため、住居址である可能性もある。調査区外の北に続くが、5.3m以上×残存2.5mで、深さは0.65m、平面形は不明である。出土遺物は総量2,606gである。十師器鉢・甕(第21図236・237)があり、372住と同時期と考えられる。

#### 4 溝

自然流路を含め溝は8条検出した。溝1は20土・溝3を切る。同じく溝3を切る368住と軸を同じくするため、同時代の区画溝のようなものかもしれない。溝2は石積1および西岸の住居址を切る。覆土は拳〜人頭大の礫で構成され、洪水性の自然流路である。横面の観察では、攪乱直下まで堆積しているため、平安時代以降長く堆積が続いたようである。南に位置する第8次調査でも洪水性の自然流路が確認されているが、位置と方向から推測すると、同一のものではなさそうである。溝3は5cm大までの礫が主体の砂礫層で、369住、7土を切る。溝5は東区南東隅に位置し、溝2と同じく洪水性の自然流路である。溝4・8も砂礫層が堆積するが、流路というほど明確なものではなく洪水堆積層の痕跡である。溝6は西区の南北方向に流れるが、住居址の覆土と同じような暗灰黄〜灰オリブ砂質土で埋没している。底面に一部砂礫層が堆積し、流水痕跡は確認できるが埋土に混じる礫の大きさから考えても洪水のように流れの強いものではない。底面には10〜30cm程度の匣門礫が集中し、被熱したものもみられる。遺物は古墳時代後期の十師器杯(第21図239・240)、奈良時代の十師器・須恵器が出土している。溝の方向から推定すると、攪乱より南側の24土、溝7を包括すると考えられ、一連の溝の可能性もある。さらに南側の第8次調査の溝1もしくは第12次調査の凹地状地形と同一のものと考えられる。出土した土器はあまり摩滅しておらず、被熱痕跡のある礫群が底面にまとまって出土するなど、第12次調査の凹地状地形との共通点も多い。

#### 5 石積遺構1

東区北東隅に位置する。東区調査終了後、北への広がりを確認するために拡張区を設定した。石積1が位置する北東部は攪乱が深く、コークス灰が地表下約1mまで堆積している。重機で検出面をやや掘り下げた高さで検出したものである。石積1を覆うように暗オリブ褐〜暗灰黄粘質土層が堆積しており、検出面は奈良・平安時代の面より0.2〜0.3m低い。当初は近世以降の暗渠と考えていたが、ほぼ直角に曲がるためトレンチを掘削し石積遺構と確認した。

西側は溝2に切られるが、一部、砂礫層との間にも暗オリブ粘質土層が堆積しており、溝2との時期差があると判断した。溝2は北にいくにつれて本遺構に近づくように流れているため、拡張区の中ほどから北は破壊されているものと推測される。

上述のように攪乱・削平を受けているため上部の構造は不明であるが、上端で東西5.6m以上、南北12.0m以上、下端で東西8.8m以上、南北13.0m以上を測る。石積の基礎部からの残存高は南辺で約0.15m、西辺東区部分で約0.80m、拡張区部分で約1.50mである。一部石を抜き取り、断ち割り断面を観察したが、15〜20cm大の扁平な重円礫を用いて石を積み上げている。また、石の間にも暗オリブ褐色粘質土が混入している。

石が積まれる法では、礫が多く混じる黄褐色〜暗灰黄色砂質土層とその下の暗オリブ褐色砂質土層で構成されている。後者は地山であるが、前者は盛土の可能性もある。基底面は基盤の砂礫層に直接石を積んで構築している。

南側には幅0.6〜1.2m、深さ約0.1mの浅い溝状遺構が石積1に沿うようにあるが、西側は溝2に切られるため周溝のようなものかわからなかった。また、拡張区の東縁に沿って南北トレンチを掘削中に石列1を確認した。調査区外の東に続くものと考えられ全容は不明である。直上まで攪乱されるが、30〜40cm大の扁平な石が並ぶ。南側には10cm程度の礫が集中している。石積1に囲まれた範囲内に位置しており、関連も考えられるが性格の特定までには至らなかった。

石積関連遺物は南側の浅い溝状に堆積した砂礫層から出土した十師器(第22図254)と、石積の下層から出土した十師器壺体部片がある。いずれも細片であるが古墳時代前期の可能性もある。

第2表 竪穴住居址一覧

No.	地区	平面形態 主軸方位	主軸×直交軸×深 (m) 床面積 (㎡)	カマド形態 位置	新 旧	時期	備考
360	東	方形	(4.1) × 4.1 × 0.45	石組か	焼土1	4~6期	東壁にもカマドあり(焼土1)。360住の層土中に被熱面があるため、別居居のカマドの可能性が高い。
		N-7-E	(12.4)	西壁中央			
361	東	方形か N-3-E	(4.6) × 4.8 × 0.46 (16.3)	石組か 東壁中央	P5、溝2 4土	6~7期	溝2層土下よりカマド検出。
362	東	長方形か N-80-E	(3.7) × (4.5) × 0.60 (12.5)	石組	5土	7期	石組カマドの遺存良好。光形遺物が数多く出土した。
363	東	方形	4.6 × 3.9 × 0.65	北壁寄寄り	362~365住	6~7期	
		N-88-W 長方形	10.9 4.6 × (3.6) × 0.45	東壁中央 石組	362住、5土、P2 364~366住 362・363住、4土、P4		
364	東	方形か N-81-E	5.8 × (3.6) × 0.75 (9.3)	不明	旧:東壁中央 新:西壁中央	6~7期	東西2ヶ所にカマドあり。遺存状況から西カマドを新カマドと判断した。
365	東	方形か N-17-E	(4.8) × (4.4) × 0.65 (17.3)	不明	362・363住、5土、P10	3~5期	調査区外に続き、カマドは未検出。大半をコンクリート基礎に覆乱されている。
366	東	方形か	(4.8) × (4.4) × 0.65	焼土面のみ 南壁寄寄り	363住、P1、溝2	4~6期	トレンチにより確認。未掘だが、カマドおよびプランを確認した。
367	東	長方形か N-5-E	(5.7) × 4.7 × 0.58 (20.0)	被熱面のみ 南西隅	12・17土	5期	調査区外に続く。カマド以外に北東隅・中央にも染土散布が確認された。
368	東	方形 N-60-E	3.2 × 3.5 × 0.25 7.6	焼土面のみ 東壁中央	369住、溝3	4期	溝3を切る。床面は砂層層である。
369	東	方形	4.9 × (4.1) × 0.42 (12.6)	石組か	368住、14・15土、 溝3	4期	南半は大きく覆乱される。
		N-16-E	(2.4) × 0.35 (6.4)	北壁中央か 石組			
370	東	隅丸方形 N-79-W	3.4 × (2.4) × 0.35 (6.4)	東壁南寄り	焼土面のみ	3~4期	調査区外に続く。カマド周辺より須恵器・須恵瓦が多量出土した。
371	東	不明	不明 × 不明 × 0.2	焼土面のみ 西壁中央か	7世紀 後半		大部分を覆乱される。
372	西	方形か	5.3 × (4.2) × 0.55 (17.4)	石組	P91・32	7世紀 後半	調査区外に続く。平安時代検出面の1層下で検出。建造が良好に遺存する。
		N-82-W	(17.4)	東壁	27土		
373	西	方形	8.8 × (8.0) × 0.52 (61.8)	不明	P94~38	3期	調査区外に続く。大型住居で、多量の遺物が出土した。美濃須恵瓦須恵器が多量出土。
		N-89-E	(61.8)	東壁中央に 被熱面あり			
374	拡張	不明	不明 × 不明 × 0.15	石組か	西壁	6~7期	拡張区掘り下げ中に検出した。トレンチおよび覆乱により全形は不明。

計測値のうち、○は残存値、□は推定値である。

主軸方向はカマドの方向として計測した。住居址隅にカマドがある367住と、カマドが検出されなかった365住については長軸を主軸とした。

カマド形態は、ほとんどの住居址で廃棄後の状況を呈していると考えられるが、周囲に被熱線が出土する場合は石組カマドと推測できる。

遺構の新旧関係はその遺構より新、旧で表示した。

第3表 土坑・ピット一覧

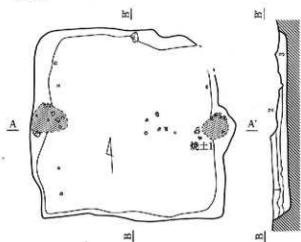
遺構No.	地区	平面形態	長軸×短軸×深 (m)	切り関関係		出土遺物	備考
				旧	新		
1土	東	長円形	1.02 × 0.50 × 0.40	石積1			
2土	東	円形か	0.90 × (0.80) × 0.38		溝2		
3土	東	円形か	(0.45) × (0.60) × 0.32		溝2		
4土	東	不明	3.50 × 3.20 × (0.26)	364住	361住	黒A杯、土師高杯・壺A・B・小型壺、須恵杯、甕	6~8期。
5土	東	楕円形	0.89 × 0.60 × 0.55	362・363・365住			
6土	東	円形	0.66 × 0.58 × 0.20			土師小型壺	
7土	東	円形	0.89 × 0.80 × 0.22				
8土	東	楕円形か	(0.50) × 0.51 × 0.10			黒A杯、土師壺A、須恵杯・甕	
9土	東	不明	4.52 × 3.45 × (0.24)		溝3	黒A、土師壺B・小型壺、須恵杯A・B・甕・壺	5~7期。
10土	東	円形	0.63 × 0.59 × 0.6				
11土	東	円形	0.50 × 0.45 × 0.14			土師甕	
12土	東	円形	0.74 × 0.59 × 0.12	367住			
13土	東	円形か	0.95 × 0.83 × 0.19			土師甕、須恵杯	
14土	東	不明	0.58 × (0.30) × 0.17	369住			
15土	東	円形	0.94 × 0.94 × 0.20		溝3		
16土	東	円形	1.01 × 0.85 × 0.27		溝3	土師壺B	

遺構 No.	地区	平面 形態	長軸×短軸×深 (m)	切り合い関係		出土遺物	備考
				旧	新		
17土	東	円形	0.70×0.64×0.14	367住			
18土	東	円形	0.80×0.65×0.31				
19土	東	円形	0.58×0.44×0.21				
20土	東	長円形	(2.7) × 1.5 × 0.29		P15・溝1		
21土	西	円形	0.75×0.70×(0.31)	22土			
22土	西	長円形小	1.50×1.35×0.38		21土	土師甕、須恵杯	
23土	西	長円形	1.37×0.76×0.08				
24土	西	不明	3.72×3.44×0.34?			土師甕A、須恵杯A・甕、焼粘土塊	8C初頃。
25土	西	円形	1.07×1.06×0.51			土師杯	
26土	西	円形	0.56×0.51×0.09				
27土	西	不明	(1.24) × (1.08) × 0.58	372住		土師甕・B・鉢、須恵蓋・甕	7C後半。
28土	西	不明	0.95×(0.46) × 0.08				
29土	西	不明	(1.00) × (0.35) × 0.15				
P1	東	円形	0.40×0.35×0.13	366住			
P2	東	円形	0.51×0.44×0.15	363住		土師甕	
P3	東	楕円形	0.39×0.27×0.11				
P4	東	円形	0.40×0.25×0.07	364住		土師甕	
P5	東	円形	0.25×0.25×0.17	361住			
P6	東	円形					未掘。
P7	東	楕円形	0.40×0.30×0.16			土師甕B	
P8	東	円形	0.48×0.42×0.05				
P9	東	円形	0.41×0.30×0.17				
P10	東	楕円形	0.43×0.31×0.10	365住		土師甕B	
P11	東	円形	0.34×0.34×0.13				
P12	東	円形	0.42×0.34×0.19				
P13	東	円形	0.29×0.19×0.16				
P14	東	円形	0.27×0.26×0.08				
P15	東	楕円形	0.36×0.25×0.25	20土			
P16	東	円形	0.44×0.39×0.14				
P17	東	楕円形	0.41×0.33×0.18				
P18	西	円形	0.42×0.39×0.23				
P19	西	円形	0.23×0.20×0.19				
P20	西	円形	0.24×0.21×0.21				
P21	西	円形	0.21×(0.15) × 0.23				
P22	西	円形	0.26×0.25×0.34				
P23	西	円形	0.25×0.18×0.20				
P24	西	円形	0.45×0.40×0.28				
P25	西	円形	0.47×0.42×0.18				
P26	西	楕円形	0.48×0.47×0.07				
P27	西	円形	0.36×0.35×0.07				
P28	西	不明					未掘。
P29	西	楕円形	0.52×0.44×0.09				
P30	西	円形	0.31×0.30×0.25				
P31	西	円形	0.30×0.28×0.40	372住			
P32	西	円形	0.30×0.24×0.42	372住			
P34	西	円形	0.43×0.42×0.13	373住			
P35	西	円形	0.33×0.30×0.69	373住			
P36	西	円形	0.34×0.34×0.29	373住			
P37	西	円形	0.30×0.30×0.50	373住		土師甕	
P38	西	円形	0.50×0.45×0.27	373住			
P39	西	円形	0.30×0.23×0.40				

第4表 溝一覧

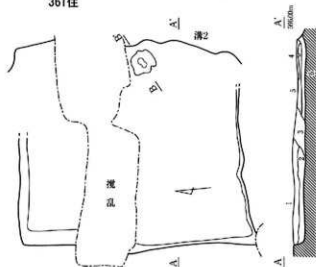
遺構 No.	地区	最大幅×深 (m)	切り合い関係		出土遺物	備考
			旧	新		
溝1	東	0.55×0.20	20土、溝3		須恵甕	369住と軸が同じ。
溝2	東	9.3×1.65以上	361・366住、 2~4土、石積1		土師甕B・C	自然流路。
溝3	東	6.9×0.8以上	369住、9土	368住、15・16 土、溝1	土師高杯	自然流路。
溝6	東	1.35以上×不明				自然流路。
溝6	西	4.25×0.67			土師器杯・柄・甕、須恵杯A・B・蓋・高杯・ 甕・蓋	7~8C代。
溝7	西	不明×0.38		24土、 P24・25	土師甕・須恵鉢A・甕	溝6と同一遺構小。
溝8	西	0.65×0.03			黒A、土師甕・甕B、須恵杯A・蓋・鉢・蓋	自然流路瓶跡。

360住



- 1 焼オリーブ褐色砂質土 (1~5cm大礫中量)
- 2 褐色黄色砂質土 (礫砂少量 1~5cm大礫中量)
- 3 空層~焼オリーブ褐色砂質土 (礫砂少量 1~5cm大礫中量)
- 4 焼オリーブ褐色砂質土 (1~2cm大礫少量 焼土少量)
- 5 褐色黄~オリーブ褐色砂質土 (砂少量)
- 6 オリーブ黄~焼オリーブ褐色砂質土 (砂・1~5cm大礫少量 焼土少量)
- 7 焼オリーブ褐色砂質土 (砂少量 焼土少量)
- 8 黄褐色砂質土 (灰白砂中量 焼土少量)
- 9 黄赤~焼オリーブ褐色砂質土 (1~5cm大礫少量 砂少量)

361住



- 1 黄赤~褐色黄色砂質土 (0.1~5cm大礫中量 焼土微量)
- 2 褐色黄~オリーブ褐色砂質土 (0.3~4cm大礫、炭化砂少量 焼土少量 灰少量)
- 3 灰~焼オリーブ褐色砂質土 (炭化物少量 焼土少量)

## カマド出土状況



362住



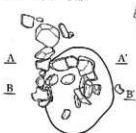
- 1 褐色黄~古褐色砂質土 (0.2~5cm大礫少量 炭化中量)
- 2 褐色黄~黄褐色砂質土 (1~15cm大礫中量 炭化物少量)
- 3 褐色黄色砂質土 (0.1~0.5cm大礫中量 灰色土塊少量)
- 4 褐色黄色砂質土 (0.1~1cm大礫、炭化物少量、灰少量)



- 1 黄褐色砂質土 (焼土、炭化物中量)
- 2 空層黄色砂質土 (炭化砂少量)
- 3 黄褐色砂質土 (1~5cm大礫少量)

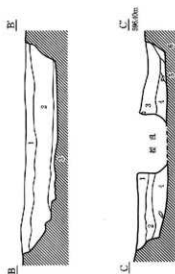
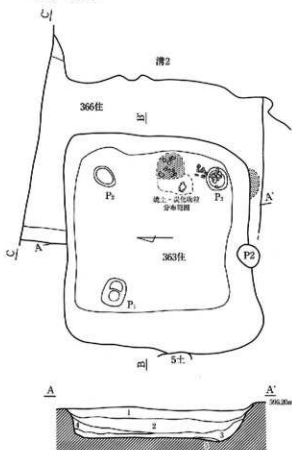


## カマド出土状況



第7図 遺構(1)

363・366住



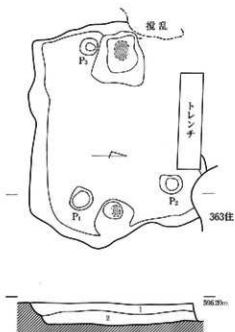
363住 [A-A' B-B']

- 1 縄文前期砂質土 (灰色土層・0.3~1cm大礫中量)
- 2 縄文前期砂質土 (灰色土層中量・0.3~3cm大礫少量 灰化物散在)
- 3 縄文前期砂質土 (灰色土層少量 0.3~4cm大礫少量 灰土混在)
- 4 縄文前期砂質土 (1~15cm大礫・灰色土層少量)
- 5 縄文前期砂質土 (灰色土層中量 0.5cm大礫少量)

366住 [C-C']

- 1 黒土-縄文前期砂質土 (~3cm大礫中量)
- 2 縄文前期砂質土 (砂少量 ~5cm大礫中量)
- 3 縄文前期砂質土 (砂 ~5cm大礫少量)
- 4 縄文前期砂質土 (砂少量 ~7cm大礫少量)
- 5 縄文前期砂質土
- 6 砂層 (5cm大礫混在)

364住



遺物出土状況



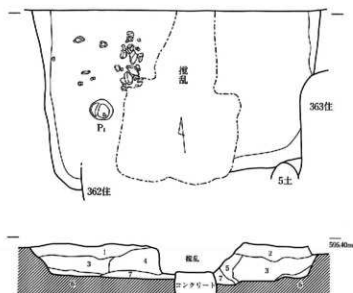
- 1 縄文前期砂質土 (0.3~1cm大礫・灰色土層少量 灰化物散在)
- 2 縄文前期砂質土 (灰色土層中量 1~15cm大礫少量)



第8図 遺構(2)

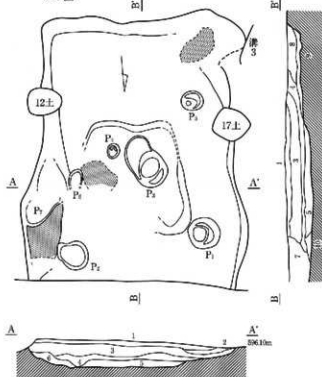


365住



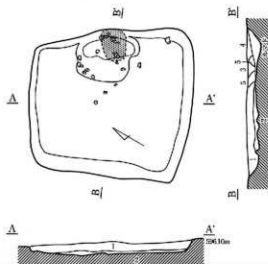
- 1 掘乱直一層褐色砂質土 (厚1~3cm大雑多量 灰白色土少量 炭化物・灰分少量)
- 2 灰~灰オリーブ層砂質土 (厚5~3cm大雑多量 灰白色土・炭分少量)
- 3 黒褐色粘質土 (層厚不定)
- 4 黒褐色粘質土 (青味おひくる)
- 5 褐色砂質土・灰分・褐色土の中量 (厚1cm大雑多量)
- 6 褐色灰黄色粘質土 (灰白色土層中量 厚1~4cm大雑多量)
- 7 褐色粘質土 (炭分中量)

367住



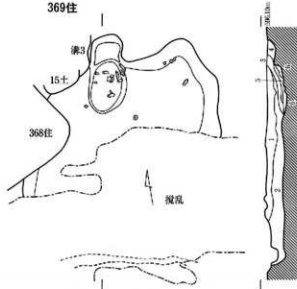
- 1 オリーブ層~暗オリーブ層粘砂質土 (厚0.5~2cm大雑多量 2~4cm大雑多量)
- 2 黒褐色粘質土 (厚0.5~2cm大雑多量 炭分少量)
- 3 暗オリーブ層粘砂質土 (厚0.5~2cm大雑多量)
- 4 黒褐色土 (炭分・灰白粘質土少量 厚2cm大雑多量)
- 5 厚黄色粘質土 (厚1~3cm大雑多量 炭土・炭化物少量)
- 6 灰白色粘質土 (厚1~3cm大雑多量 炭分少量)
- 7 黒褐色粘質土 (厚3cm大雑多量)
- 8 褐色粘質土
- 9 灰白~暗オリーブ層粘砂質土
- 10 褐色灰黄色粘質土 (炭分少量 厚2cm大雑多量)

368住



- 1 灰褐色砂質土 (厚3cm大雑多量)
- 2 砂層 (厚オリーブ層粘砂質土混入)
- 3 灰黄色粘質土 (厚2cm大雑多量)
- 4 黒褐色粘質土 (厚3cm大雑多量)
- 5 灰白~褐色灰黄色粘質土

369住



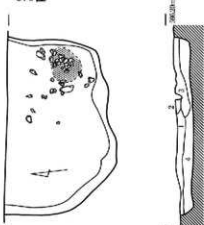
- 1 褐色灰黄色粘質土 (厚1~5cm大雑多量)
- 2 黄灰~褐色灰黄色粘質土 (厚5~10cm大雑多量 灰白色土少量)
- 3 褐色灰黄色粘質土 (炭土中量)
- 4 暗オリーブ層粘砂質土 (厚1~2cm大雑多量 炭土少量)
- 5 褐色灰黄色粘質土 (炭分少量 粘土少量)
- 6 暗オリーブ層粘砂質土 (炭分少量 粘土少量)

374住



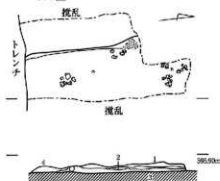
第9図 遺構(3)

370住



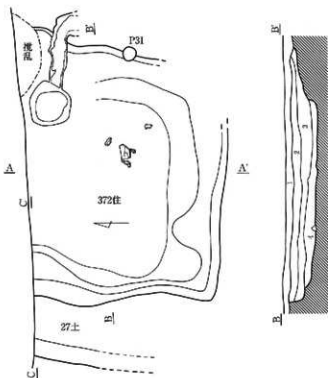
- 1 堀イリーブ褐色砂質土 (約3cm大塚中層 灰土少量)
- 2 空堀一場イリーブ褐色砂質土 (灰分・炭多量)
- 3 堀イリーブ褐色砂質土 (灰分中量 約2cm大塚中層)
- 4 堀イリーブ褐色砂質土 (灰分・灰土・褐色砂土多量)

371住



- 1 堀イリーブ褐色砂質土 (約3cm大塚中層)
- 2 イリーブ褐色砂質土 (掘削)
- 3 堀イリーブ褐色砂質土 (掘削)
- 4 空堀一場イリーブ褐色砂質土 (約2cm大塚中層)

372住・27土

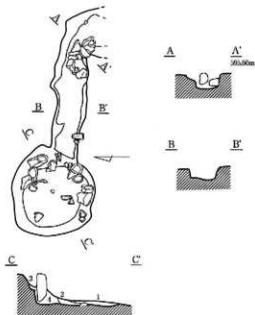


- 372住
- 1 灰分層
  - 2 堀イリーブ褐色砂質土 (掘削層1~3cm大塚中層 灰土少量)
  - 3 堀イリーブ褐色砂質土 (2cm大塚中層 灰分・灰土少量)
  - 4 堀イリーブ褐色砂質土 (2~4cm大塚中層 灰土少量)
  - 5 堀イリーブ褐色砂質土 (1~4cm大塚中層)

- 27土
- 6 堀イリーブ褐色砂質土 (約5cm大塚中層 灰土少量)
  - 7 堀イリーブ褐色砂質土 (約10cm大塚中層 灰分・灰土少量)
  - 8 堀イリーブ褐色砂質土 (1cm大塚中層)

0 2m

カマド出土状況



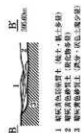
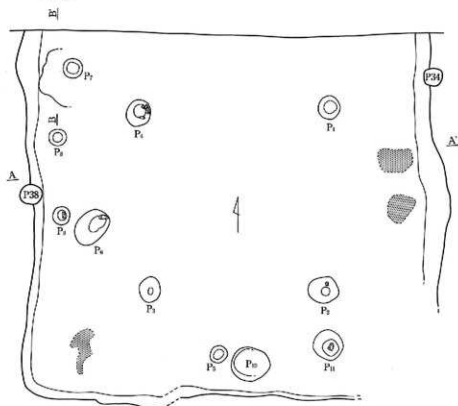
- 1 堀イリーブ褐色砂質土 (掘削中層)
- 2 堀イリーブ褐色砂質土 (掘削中層 小塚中層 褐色灰土層)
- 3 堀イリーブ褐色砂質土 (掘削中層)
- 4 イリーブ褐色砂質土 (掘削中層)

0 1m

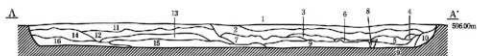
27土遺物出土状況



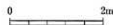
373住



- 1 灰土~紅灰色砂質土 (灰分、灰色土層中量)
- 2 紅灰色砂質土 (灰分少量中量 2~6cm土層少量)
- 3 灰土~紅灰色砂質土 (灰分少量) (灰分少量 灰色土層、~3cm土層少量)
- 4 灰土~紅灰色砂質土 (灰分少量)
- 5 灰土~紅灰色砂質土 (灰分少量)
- 6 灰土~紅灰色砂質土 (灰分、灰色土層少量 4cm土層少量)
- 7 灰土砂質土 (灰分少量 灰色土層中量 ~6cm土層、少量物少量)
- 8 灰土~紅灰色砂質土 (灰分中量 灰色土層少量)
- 9 紅灰色砂質土 (~6cm土層、灰分少量 灰色土層少量)
- 10 紅灰色~黃褐色粘粉質土 (灰色土層、灰分中量)
- 11 紅灰色砂質土 (灰分中量 灰化物、1cm土層少量)
- 12 紅灰色砂質土 (灰分少量 灰化物少量 灰色土層中量)
- 13 灰土~紅灰色粘粉質土 (灰分、灰分少量 灰色土層中量)
- 14 紅灰色砂質土 (灰色土層、灰分中量 灰化物少量)
- 15 灰土~紅灰色砂質土 (灰色土層中量 灰分少量 1cm土層少量)
- 16 灰~灰土~灰土粘粉質土 (灰分、1cm土層少量 灰化物少量)



遺物出土状況



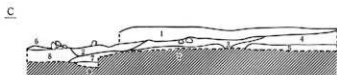
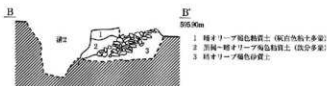
第11図 遺構 (5)

石積 1・石列 1

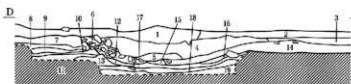


第12図 遺構(6)

石積 1

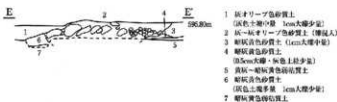


- 1 礫状黄色粘質土 (灰化層・1cm大礫状)
- 2 砂礫層 (古堀跡付)
- 3 砂礫層 (1~15cm大礫状)
- 4 砂礫層 (1~10cm大礫状)
- 5 砂礫層 (1~7cm大礫状、砂多量)
- 6 灰オリーブ色砂質土
- 7 砂礫層
- 8 砂礫層 (1~5cm大礫状)
- 9 砂層 (厚縁)



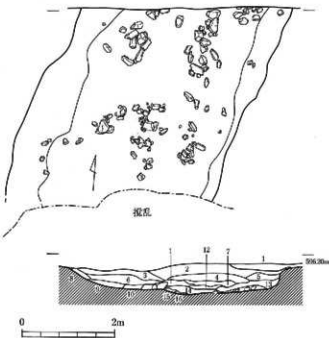
- 1 灰オリーブ色砂質土
- 2 礫状黄色粘質土 (灰化土塊中量 1~3cm大礫状)
- 3 礫状黄色砂質土 (灰化土塊中量)
- 4 礫状黄色粘質土 (灰化層・1cm大礫状)
- 5 礫状黄色粘質土 (灰化層付 2~5cm大礫状)
- 6 石積層 (10~20cm大礫・礫状黄色粘質土混入)
- 7 礫状黄色粘質土 (灰化土塊少量)
- 8 礫状黄色砂質土
- 9 灰オリーブオリーブ灰色砂質土
- 10 礫状黄色粘質土
- 11 オリーブ灰色砂質土
- 12 砂礫層 (灰オリーブ色砂質土)
- 13 灰色砂質土 (灰化少量)
- 14 砂礫層 (厚縁付)
- 15 灰オリーブ色粘質土 (2~4cm大礫状)
- 16 灰色砂質土
- 17 灰オリーブ色砂質土 (褐色土塊中量)
- 18 砂礫層
- 19 厚縁 (厚縁)

石列 1

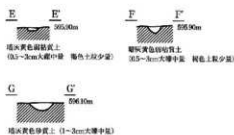


- 1 灰オリーブ色砂質土 (灰化土塊中量 1cm大礫少量)
- 2 灰~灰オリーブ色砂質土 (厚縁付)
- 3 礫状黄色粘質土 (1cm大礫中量)
- 4 礫状黄色粘質土 (10~5cm大礫・灰色土塊少量)
- 5 黄灰~礫状黄色粘質土
- 6 礫状黄色粘質土 (灰化土塊少量 1cm大礫少量)
- 7 礫状黄色粘質土

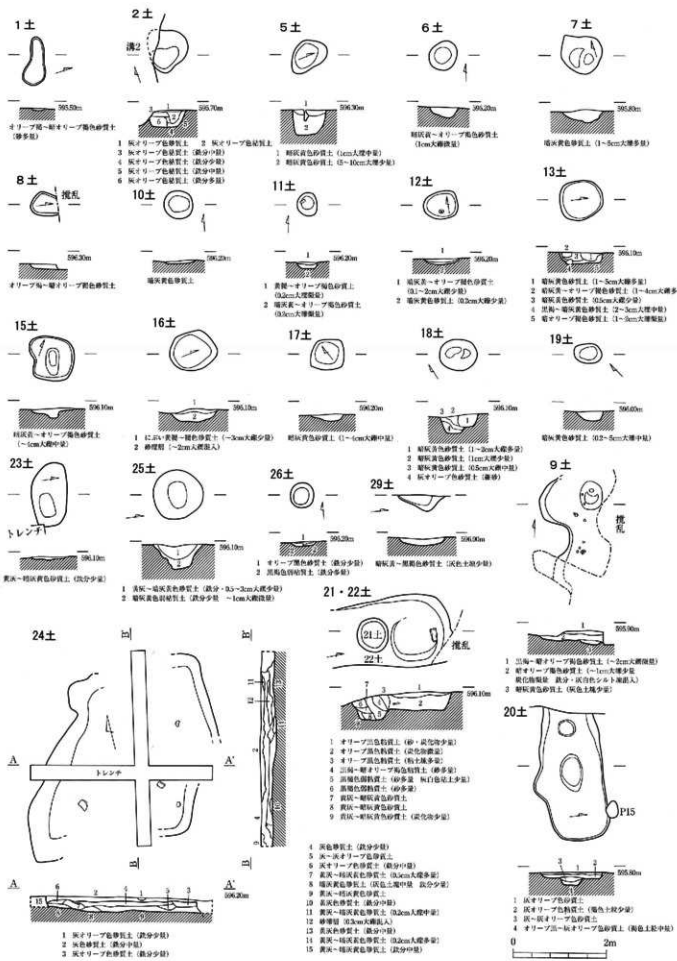
溝 6



溝 1



- 1 礫状黄色粘質土 (灰化中量 黄褐色土塊少量)
- 2 礫状黄色粘質土 (砂少量)
- 3 灰オリーブ色砂質土 (灰化少量)
- 4 灰オリーブ色砂質土 (灰化土塊中量)
- 5 灰オリーブ色砂質土 (灰化中量)
- 6 礫状黄色粘質土 (10~5cm大礫中量)
- 7 灰オリーブ色粘質土 (灰化少量)
- 8 黄灰~礫状黄色粘質土 (灰化少量)
- 9 礫状黄色粘質土 (灰化中量)
- 10 砂礫層
- 11 黄灰~礫状黄色粘質土 (灰化土塊中量 灰化少量 10~20cm大礫少量)
- 12 灰オリーブ色砂質土 (灰化少量)
- 13 灰オリーブ色砂質土 (灰化中量)
- 14 砂礫層
- 15 灰オリーブ色粘質土 (灰化少量)
- 16 砂礫層



第14図 遺構(8)

### 第3節 遺物

#### 1 土器

##### (1) 概要

土器は遺構内、検出面等から出土があり、明らかに近代の攪乱に伴う陶磁器類を除き全点を回収した。総量で85,691gとなる。

土器の整理は、洗浄の後、取り上げた単位毎に遺構順になるように固有の番号を振り、上段に遺跡・調査名である「出ガワ南15」を、下段に固有番号と所属遺構等を注記した。接合は、まず所属遺構内で、次いで周辺遺構、検出面等で、出土地点を跨いだ接合がないかを検討しながら行った。この段階で、遠距離にある遺構間での接合について見落とされている可能性はある。実測遺物の選別は、残存度が良いものを中心にしたが、甕類など大型の器種については大破片であっても図化不能で選別できなかったものも少なくない。また、この段階で遺構単位の土器群の特徴を示そうという選別傾向が生じている可能性は当然ある。実測は従来の考古学的手法によって、基本的に側面図に断面図を組み合わせる作図法でいい、底面図が必要と判断したものについてはこれを付した。最終的に本報告書へは262点を図化提示できた。実測図の断面が白抜きは土師器と黒色土器、黒塗りは須恵器と軟質須恵器を示している。軟質須恵器は土器番号の脇にNの字を付した。

出土土器の記述は、個別の器種・器形の属性を探ることと、遺構等出土の土器群の時期・性格を把握することの2点に重点を置いた。出土土器群全体を掌握し客観化する作業は困難なものであり、様々な方法が試みられているが、今回はあくまでも調査地や遺跡の歴史的な位置付けや評価に即応できることを主眼とした。本文中の番号は第15～22図の土器実測図の番号に一致する。「甕形土器」等の名称の「形土器」は省略した。

なお、器種・器形の分類と名称及び土器群の年代観は、古墳時代後期の杯類については文献1、奈良・平安時代の土器全般については文献2に準じた。

##### (2) 種別、器種・器形

調査全体で出土した種別は土師器、黒色土器、須恵器、軟質須恵器の4種がある。陶磁器類の出土はなかった。時期的には、すべてが古墳時代と奈良時代、平安時代前期に属する。

##### ア 古墳時代の土器

主に古墳時代後期の土師器と須恵器が出土している。土師器の中には内面または内外面黒色処理が行われているものがあるが、この時期には黒色処理技法が特定の器種に必ずしもすべて行われている訳ではないとの理解から、あえて黒色土器の語を避けた。

##### (ア) 土師器

##### 杯 (142～147・239・240)

基本的に丸底で、口縁部に強いヨコナデが施された後、内面または内外面に横のミガキ、体部下半帯に手持ケズリが行われるものである。文献1による古墳時代後期の土師器杯は杯Aから杯Sまでの19器形に分類されているが、今回調査も同一遺跡内の別地点であるためこの分類を従う。すると杯A3:144、杯B3:240、杯E:142、杯Jc:239、杯M:147、杯P:143・146、杯O:145となる。いずれも丸底または丸底気味を呈するので底径は計測し得ない。145～147・240は内面に、また239は内外面に黒色処理が行われている。

##### 鉢 (148・151・236)

定型的な鉢と呼ぶべき器種はなく、他の器種・器形に該当しないものをまとめた感が強い。148は杯Jを大型化した形態で、杯Jと同機能と考えるが、寸法によって鉢に分類した。151は小型の甕に似るが、内外面にミガキがあり、内面には黒色処理が行われているのでここに含めた。236も同様に小型の甕に似るが、頸部にくびれがなく、内外面にミガキがある。

### 甕 (140・141・150・237)

文獻 2 の甕Aに相当する、古墳時代後期に伝統的な長胴形の甕である。口縁部を強くヨコナデされ、成形・調整ともに雑でナデや工具ナデが多用されている。底部は厚く、底面に木葉圧痕を残す。237のような中型品には底部を丸底気味に仕上げるものもある。

### 壺 (152～154)

丸く張る胴部に「く」の字の口縁部がつき、胴部にミガキが行われるものである。古墳時代に特徴的な器種で、奈良時代以降はわずかに胴張り甕として古い時期に残るのみである。

### その他の器種 (18・226・238・254)

古墳時代後期に属さないものをまとめた。18は球形胴で「く」の字に外反する口縁を持つ壺と推定する。古墳時代中期に含めたい。226は脚接合部で、弥生時代または古墳時代前期の台付甕の一部と考える。238は4段成形の高杯の脚柱部で、内面上半に絞り痕、下半に横のケズリがあり、外面は縦のミガキがなされる。古墳時代中期に属する。254は内湾気味に開く口縁部で、おそらく増かヒサゴ壺の一部になるのではないかと考えている。口縁端部の内側に面が作られているのが特徴といえよう。古墳時代前期に遡る可能性を認めたい。

#### (イ) 須志器

##### 杯身 (160)

蓋杯の杯身が1点図化できたが、口縁の立ち上がり部を欠き、全形は不明である。蓋受け部の最大径は11.4 cmを測る。

##### 杯蓋 (149・158・159・235)

蓋杯の杯蓋は肩部に稜を持つ158・159と、天井部からなだらかに端部に至る149・235の2形態がある。一般に稜を持つ形態の方が古式と認識されているが、本例はいずれも古墳時代後期の中で収まるものとする。159には口縁端部内側に沈線状の窪みが一周しており、かつて面取りされていた形状の痕跡を残している。

##### 高杯 (246)

高杯脚端部と思われる破片が1点ある。ロクロナデの単純な端部となっており、面取り等がないので高杯ではない可能性もある。

### 甕 (155)

数種類の胴部破片が出上しているが、口縁部から胴部までまとまった形で図化できたのは155の中型の甕1点のみである。口縁端部の肥厚部に沈線が巡らされ、胴部外面は平行線タキ、内面には全面的に同心円紋当て具痕が明瞭に残る。

#### イ 奈良・平安時代の土器

上土器と黒色土器の関係は、特殊なものを除き、小型の食膳具を黒色土器、炊飯具を土器で作り分けている。須志器には食膳具と貯蔵具がある。軟質須志器は須志器に比べて胎土が粗く、一応、還元炎焼成だが軟質土器で杯の存在のみが確認されている。

#### (ア) 土師器

##### 杯 (156)

1点のみ、器内系の暗文杯が確認されている。橙色の特徴的な胎土を有し、体部に斜放射の暗文が付けられている。底面内部には円形螺旋の暗文が施されていた形跡が窺える。口径に対して器高が低く、畿内の編年では新しい方に位置づけられている。この器種は本市域では8世紀代にわずかに類例が認められるのみである。

##### 碗 (241・242)

本例はいずれも破片資料で全形を知りえないが、黒色土器Aの杯Aに近い形態を呈すと推定する。胎土が白色微細で焼成があまい。



### 壺 (38)

大型の器種である壺Aの口縁部破片が1点のみ図化できている。壺Aが盛行するのは9世紀末以降であるが、本例のような古い時期には出土例が少なく、初期の消長や型式変化については未だ不明な点が多い。

#### 小型壺

小型壺は多数出土しているが、ロクロナデが行われる小型壺Dと、ロクロナデが行われずハケメを有する小型壺Bが認められる。小型壺Dは胴部外面全面にカキメが施され、底面には回転糸切痕が残る。中にはハケメをかけた後にカキメを施した折衷的な技法が認められるもの(202)もある。小型壺Bは胴部外面に縦のハケメを持つものを特徴とするが、胴下部は横のハケメの場合もある。小型壺Dは土師器壺Bの出現に前後して登場することが知られており、先行する小型壺Bとの間の型的断絶をどのように捉えるか、今後の課題となる。

#### 壺

古墳時代後期から伝統的な長胴形の壺Aとハケメを多用する長胴形の壺Bがあり、壺Bが圧倒的に多い。壺Bは松本盆地南部と天竜川水系に主体的に分布する土師器壺である。この他に東信型の壺である壺C(いわゆる武蔵壺:16・257)と北信型の壺(136)がわずかに出土している。

壺Bの基本形は、胴部外面に縦のハケメ、内面に縦長のエビナデ痕がのこり、口縁部はロクロ調整されて内面にカキメが施されている。しかしながら、今回報告の壺Bの中には口縁部内面がカキメではなく横のハケメのものが多数見られ、これらは胴部内面にもハケメや工具ナデを有するものが多い。一方、胴部外面上半のハケメの上にロクロナデの痕跡を留めるものもあり(105・135)、これには口縁内面にハケメやカキメが行われていない。文献2に基けばロクロナデが行われるものは壺Dと分類されているが、壺Dは外面のハケメが顕著ではない。したがって、本例は壺Bと壺Dの折衷型と理解したい。ここでは便宜的に口縁内面がカキメのものを壺B1、ハケメのものを壺B2、さらに胴部内面に縦長のエビナデ痕を持つものにa、ハケメや工具ナデのものにbを付し、壺Dとの折衷型は壺B3と分類しておく。おそらく大きな流れは壺B2bから壺B1aへと型式変化をとげていったものと考えられる。

壺Cは東信地方で盛行する器形で、8世紀後半から9世紀代にかけて本市域でも散見される。小型壺Cとセットになっており、その型式変化は文献2や東信地方の報告に詳しく触れられているのでここでは省く。

北信型の壺は文献2では分類にないが、8世紀後半から10世紀代に北信地方で土師器壺の主体をなし、9世紀後半以降には同じ千曲川水系の東信地方にも進出する。その反面、北安曇郡以南の中南信地方では奈良・平安時代を通して皆無に近い。本出土例は非常に珍しいものと言える。胴部が砲弾型を呈し、内面全面にカキメを有するのが大きな特徴である。胴部外面は工具によるケズリに近い縦の調整痕で溝たされ、わずかにタタキの痕跡が認められる。

### 鍋 (83)

珍しい器種で1点が出土している。壺B1aの口径を広げ器高を下げた現代の楕円形形態で、胴部外面のハケメ、口縁部内面のカキメの存在なども一致し、製作技法は壺B1aと同様であったと考える。北信地方でも北信型の壺の製作技法と同様な鍋の存在が確認されており、数量的には少ないが、地域をまたいで一定の用途が付与されていた器種と考えたい。

#### (イ) 黒色土器

##### 杯

食器類の主体を占める器種のひとつで多数の「出」がある。器形は定型化した杯Aのみで、寸法によって杯AⅠと杯AⅡの2種があり、杯AⅡは口径13cm、器高4cm前後、杯AⅠは口径15~16cm、器高5~6cmを測る。いずれも体部外面は丁寧なロクロナデ、内面は細かい放射状のミガキが行われ、底面には回転糸切痕が残る。古い形態は内面のミガキが放射状ではなく細かく緻密で、底面の糸切痕を丁寧にケズリ落としている。次項で述べる黒色土

器Aの特殊な鉢(108)のようなものが祖形で、金属器の鍔か二彩・二彩の杯形ものを模倣して出現すると考える。出現直後からⅠ、Ⅱの寸法の分化がある。

#### 鉢(35・108)

杯AⅠをさらに大形化したもので、口径は20cmを超える。片口が付くものもあるが、今回の調査では片口付は確認できなかった。この他に特殊なものとして108を鉢に加えた。基本的には杯AⅠと同形態であるが、口縁外面に粗雑な沈線が一周し、佐波理碗を模倣、あるいは佐波理碗を模倣した須恵器を再模倣したものとして捉えて鉢とした。ロクロナデで調整されるが、体部下端から底面一帯に丁寧な手持ケズリを行っている。杯Aの祖形にあたりと考えている。

#### 碗(217)

わずかがが出しがある。1点を図化提示でき、それ以外にも2個体ほどみられた。形態的には杯Aに高台が付されたもので、ロクロナデの後、体部内面に放射状に細かいミガキをかけ、焼成時に黒色処理を行っている。出現の契機は緑釉陶器、灰釉陶器、あるいは輸入磁器の碗の模倣であろう。黒色土器Aの碗は9世紀末以降に盛行するため、土器群の伴出関係に問題がなければ、本例は古相にあたるものとなる。

#### 皿(36・37)

皿Bが少数出土している。2点を図化提示できた。ロクロナデの扁平な体部に高台を付したもので、内面は細かいミガキの後、黒色処理が行われ、底面には回転糸切痕が残る。出現の契機は、輸入磁器またはそれを模した緑釉陶器の更なる模倣という見解と、木製の漆皿を写したものと見方もある。9世紀の後半に特徴的な器種である。

#### (ウ) 須恵器

##### 杯

高台を持たない杯Aと高台を有する杯Bの2者が認められ、いずれも多数が出土している。

杯Aはほとんどが平底だが、丸底気味のものがある(233・234)。丸底気味の方が古い形態であろう。平底の中にも、底面がヘラ切・ヘラケズリのもので回転糸切のものがあり、時期差に起因すると考えられる。ここでは丸底気味のを杯A1、平底で底面がヘラ切・ヘラケズリのを杯A2、底面が糸切のを杯A3と仮称する。概ね杯A1は7世紀末から8世紀第1四半期、杯A2は8世紀第2～3四半期、杯A3は8世紀第3四半期以降と把握している。

杯Bは口径に比して器高の低いものと高いもの2形態がある。底面は回転ケズリが行われるが、その中央部に回転糸切痕を残して、切り離しが糸によることが判るものと、全面的に回転ケズリが行われ、切り離し方法にわかに判別できないものがあり、後者は底部の下部への膨らみ具合によってヘラによる切り離しか糸切かを推定している。杯Bの分類としては、ヘラによる切り離しと推定されるものを杯B1、糸切と推定されるものを杯B2、底面中央部に糸切痕をケズリ残すものを杯B3としておく。この3種の底面状態の違いも、時期差に起因すると考えられる。すなわち杯Aと同様に、杯B2の糸切が導入されるのは8世紀第3四半期以降で、さらに杯B3の底面中央部に糸切痕がケズリ残されるものは8世紀第4四半期以降と考える。

#### 皿(219)

須恵器の中では珍しい器種で、黒色土器の皿と同じ形態を呈するが、内面にミガキはない。本調査では1点のみ認められた。底部一帯を欠くが、他遺跡の例から見ると付け高台を伴っているものと糸切底のままの2者があり、本例の全形を推定するのはむずかしい。

##### 蓋

端部が短く屈曲し天井部に扁平な宝珠つまみを有する蓋Bがほとんどだが、例外的に天井部に回転糸切痕をそのまま残す190や、端部の屈曲が長い101などがある。いずれの蓋Bも反転して開口部を上にした状態で成形され、ロクロナデによって端部の屈曲も形成される。ヘラないしは糸によって切り離されて伏せられ、最後の工程で天井部

に回転ケズリが加えられて宝珠つまみが付せられる。切り離し方法は伴出する須恵器杯Aや杯Bに準じて時期差による変化があると考え、190のような特殊な例を除いて切り離し痕は全くケズリ消されているので確証はない。190は糸切部を底部に据えて皿形の器種とも考えたが、端部の屈曲が蓋Bに酷似するため蓋と分類した。101については上下反転して高台が付される盤または高盤になる可能性も考えたが、図上では高台径が小さくなりすぎるため蓋と分類した。口径の大きさなどから、通常の杯Bではなく金属器模倣の鉢や皿などと組み合わせるものと考えられる。

#### 長頸壺

口縁端部がわずかに立ち上がり、胴部の肩が丸い長頸壺Aと、口縁端部がそのまま外反し、肩部に稜を有する長頸壺Bがある。今回は破片資料がわずかに出土しているのみである。時期的には長頸壺Bの登場が8世紀前半台と先行し、長頸壺Aは9世紀後半から10世紀代に主流となる。図示した19と56はいずれも長頸壺Aになると想定している。20は底部破片なのでA・Bの判別がつかない。

#### 壺

明らかに短頸壺等の器種が弁別できないものを「壺」としてまとめてある。

#### 甕

須恵器の大型貯蔵具の破片は多いが、その大きさ故に図化できたものは多くない。長めの口縁部が外反しながら大きく開く中型・大型の甕A、中型で甕Aに比べて口縁部が短く開く甕C、中型で肩部が張り、そこから頸部がわずかにくびれて短い口縁部が開く平底の甕Eの3器形が認められる。また甕Aの中型品には凸帯付四耳甕である甕Dが含まれている可能性もあるが、耳部の出土はない。いずれも胴部にタタキ、口縁部にクロコナデがおこなわれる。

#### 不明器種 (58・59)

相似形の2点が出土している。同一個体の可能性もある。大型の甕Aの口縁部状を呈して外開するが、端部近くで大きく屈曲して開く。端部が面取り状を呈することから大型の台状の形態になると想定して脚部として図化した。自然釉の飛び方からみると上下が逆転して口縁部である可能性も高い。口縁部とした場合も、どのような器種になるのかまったくわからない。

#### (エ) 軟質須恵器

##### 杯 (11・77)

わずかな存在が確認されており、2点を図化した。食膳具の主体が黒色土器Aの杯Aと須恵器杯Aの底面に回転糸切痕を有す段階のものに占められる土器群の中に混じって存在する。前述したとおり、還元状態で焼成されて暗灰色を呈しているが焼きはあまく、胎土は粗雑で脆い。

#### (3) 土器群

##### ア 東海系の須恵器

須恵器の中には灰白色硬質な胎土を持ち、明らかに他と異なる土質な焼成状態を示す一群がある。主な器種器形は杯A、杯B、蓋Bであるが甕A、甕Eにも類例がある。これらは在地の須恵器窯産ではなく東海地方西部の窯で焼成され、当地に搬入されたものと考え。特に注日されるのは美濃須恵窯製品であり、文献2でも当地域に多量に流入したことが触れられている。当該窯産と推定できる個体は、杯Aでは164・178、杯Bでは180～186・188・189、蓋Bでは191～193などであり、このほか図示できなかったが甕Eなどにも含まれていると考える。373号住居址出土品が大半を占めており、同住居址出土の土器群の時期的な問題と、器種器形の組み合わせ上の特性および同住居址そのものの性格が原因と考える。

##### イ 遺構出土の土器群

前述のように土器群をより客観的に把握し記述・提示しようという作業は、現場でも整理レベルでも時間と経費

を要するものであり、また細分に過ぎると最終的であるべき歴史叙述に用をなさなくなる恐れもある。したがって、ここではまとまった出土量があり、図化提示できた個体数が多い遺構出土器群について、図化提示できた土器を中心に遺構ごとに観察する手段を探りたい。

なお、遺構間接合のあった個体が10点ほど認められるが、最終的に残存度の多い方の遺構に帰属させた。接合の原因は遺構間の切り合いによる混入、上への擾乱等による混入がほとんどと考えるが、正直なところ十分な検討ができなかったものが多い。観察表の注記の欄で確認をいただきたい。

(ア) 第361号住居址出土土器群

15点を図化している。食膳具が黒色土器Aの杯Aと須恵器の杯A3で構成され、わずかに軟質須恵器の杯Aが混じる。土師器甕は甕B1が主体で甕Cが伴っている。黒色土器A杯Aと須恵器杯A3の比率がほぼ半々で、軟質須恵器が伴いながら黒色土器Aの椀がない点などから、本土器群は文献2に従えば6～7期、9世紀第2・3四半期に相当しよう。

(イ) 第362号住居址出土土器群

39点を図化している。食膳具が黒色土器Aの杯Aと須恵器の杯A3で構成され、土師器甕は甕B1aが主体となっている。黒色土器A杯Aと須恵器杯A3の比率がほぼ半々で、これに黒色土器Aの椀と皿Bと土師器の小型甕Dが伴う構成は7期、9世紀第3四半期に相当しよう。

(ウ) 第363号住居址出土土器群

11点を図化している。食膳具が須恵器の杯A2・杯A3と杯Bおよび黒色土器Aの杯Aで構成されている。土師器は甕B1aで小型甕Dが伴う。須恵器の甕Cがみられる。本土器群は時期的に2分され、古相は須恵器杯A2・B、須恵器蓋で、新相が黒色土器Aと土師器甕B1a、小型甕Dである。文献2に従えば古層は5～6期、9世紀前半期、新相は6～7期、9世紀第2・3四半期に相当する。本址に直接帰属する時期は新相をもってあてたい。

(エ) 第364号住居址出土土器群

17点を図化している。食膳具が黒色土器Aの杯Aと須恵器の杯A3で構成され、わずかに軟質須恵器の杯Aが混じる。土師器は甕B1が主体で甕C、小型甕Dが伴っている。黒色土器A杯Aと須恵器杯A3の比率がほぼ半々で、軟質須恵器が伴いながら黒色土器Aの椀がない点などから、本土器群は361住居址群と同様に6～7期、9世紀第2・3四半期に相当しよう。

(オ) 第367号住居址出土土器群

13点を図化している。食膳具は須恵器の杯A3が主体で、わずかに黒色土器Aの杯Aが混じる。煮炊具は土師器甕Bだが103のような異質なものをや甕B3を含んでいる。須恵器杯Bが認められないが、5期に前後する時期の土器群と捉え、9世紀第1四半期に置きたい。

(カ) 第368号住居址出土土器群

12点を図化している。食膳具は須恵器の杯B3と蓋Bで構成され、杯AかBの判別がつかないものが3点あるが、杯Aとすれば腰の張る比較的古い形態を呈すものと考えられる。また須恵器椀Aが1点認められた。黒色土器Aは佐波理椀を模倣したと推定する特殊な鉢(108)が1点のみである。煮炊具は土師器の甕B2と小型甕Bである。4期に前後する時期の土器群と捉え、8世紀後半の時期を考えたい。

(キ) 第369号住居址出土土器群

11点を図化している。食膳具は須恵器の杯A、杯B2・B3、蓋Bで構成され、煮炊具は土師器の甕Bである。4期を前後する時期の土器群と捉え、8世紀後半の時期を考えるが、土師器甕Aの存在や須恵器蓋Bの形態から、第368号住居址出土土器群に先行すると見たい。

(ク) 第370号住居址出土土器群

9点を図化している。食膳具は須恵器の杯A2、蓋Bと黒色土器Aの杯Aであるが、須恵器蓋Bの存在から同杯

Bも伴っていたと考えてよいだろう。煮炊具は土師器の甕B3と北信型の甕である。北信型の甕の存在は特異な事例と扱っても甕B3の時代的評価がむずかしい。1点のみの黒色土器Aの杯Aが底面に糸切痕を残すものである点に疑義が生じるが、須恵器杯A2や土師器甕B3を根拠にして、3～4期の土器群と捉え、8世紀中葉～後半の時期を想定したい。

(ケ) 第372号住居址出土土器群

14点を図化している。全体的に古墳時代後期の資料で、土師器の杯、鉢、甕、壺、須恵器の杯蓋、甕が出土している。土師器杯類の形態から7世紀代、須恵器の杯蓋から7世紀後半の時期が推定できると考える。

(コ) 第373号住居址出土土器群

60点を図化している。食器類は須恵器の杯A2とB1が圧倒的多数を占め、蓋Bも伴っている。珍しいものとして天井部に糸切痕を残す須恵器の蓋(190)と土師器の甕内系暗紋杯(156)がある。煮炊具は土師器の甕Aと甕B2で、甕Gに類似する破片も伴っている。また、小型甕Dがわずかに作う。貯蔵具は須恵器の甕Cと甕Eがみられる。土師器や黒色土器の定型的な杯類を欠き、須恵器の杯類に糸切技法がほとんどない点から3期の良好な資料であり、8世紀中葉に位置づけられる。なお158～160の須恵器蓋杯の杯蓋と杯身は7世紀代以前のもので、混入品と判断した。

(サ) 第24号土坑出土土器群

須恵器杯Aを3点図化しているが、いずれも杯A1で8世紀初頭に位置づけられる一群であろう。

(シ) 第27号土坑出土土器群

須恵器杯蓋と土師器の甕、鉢が図化されている。いずれも7世紀代の後半に遡る資料と考えられ、時代的には古墳時代後期の第372号住居址出土土器群に匹敵する内容と考える。

(ス) その他の土器群

少ない個体数から時期判別を行うのはかなり危険性が伴うが、敢えて想定すれば第360号住居址は4～6期、第365号住居址は3～5期、第366号住居址は4～6期、第371号住居址は古墳時代後期7世紀後半、第374号住居址は6～7期、第4号土坑が6～8期、第9号土坑が5～7期、溝6は7～8世紀代全般となろう。

参考文献

- 1 竹原守 1994「土器」『松本市文化財調査報告No.115 出川南遺跡Ⅳ・平田型方墳群緊急発掘調査報告書』松本市教育委員会
- 2 小平和男 1990「古代の土器」『中央自動車道長野県歴史文化財発掘調査報告書4—松本市その1—総論編』長野県教育委員会
- 3 堀隆 1987「佐久地方における様相」『長野県考古学会誌 信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相—』56・57 長野県考古学会
- 4 原明芳 1996「甲信州地域の8・9世紀の煮炊具」『古代の土器研究—律令の土器様式の西・東4 煮炊具—』古代の土器研究会
- 5 武井雅尚 1996「信濃における奈良・平安時代の土師器甕について」『銅と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大仏堂発行委員会

2 石製品

4点の石器が出土した。内訳は、凹・磨石1点、砥石1点、剥片1点、不明1点(砂岩)である。このほかに入為・自然為が判然としない礫片4点(砂岩1点、硬砂岩2点、凝灰岩1点)と被熱した砂岩の破片1点が出土している。以下では定形的な石器2点、剥片1点について図化し、種類別に記載する。

凹・磨石(第22図1)

凹み、磨面の両方を併せもつため凹・磨石とした。扁平な砂岩製で、平面形が不整な楕円形礫を素材とする。表裏両面には、礫の中央から少し外れた位置に敲打による凹みが1箇所ずつあり、表の凹みは長軸×短軸×深さが36.6×24.5×5.8mm、裏は28.4×21.7×2.9mmと違いがある。右側面に107.5×18.9mmの磨面がある。

砥石(第22図2)

片側が折損しているが、やや扁平な角柱状の砂岩礫を素材にし、平面形は長方形を呈していたと考えられる。表裏両面と右側面(図での上)の3面に砥面が観察された。右側面は下方でわずかに内湾しており、長辺と平行す

る線状痕がみられる。裏面には、金属製品の刃を斜めに立てて研いだと考えられる、幅・深さ共にmm以下の多数の線状痕が観察される。

### 剥片(第22図3)

灰色のチャート素材とする。片面の下半に原石の表皮が認められる。360住北側の遺物包含層から出土した。

### 3 鉄製品(第22図1~3)

5点出土したうちの3点を図示した。1・2は刀子である。いずれも373住の床面直上から出土した。1はほぼ完形で、関は棟側に緩く設け、刃側は不明瞭である。身部の形態はほぼ直線的に伸び、切先付近で角を持つ。2は茎部が欠損するが、刃側に関を設け、棟側は不明瞭である。3はヤリガンナである。刃部に向かって幅が広くなり、緩やかに反っている。

第5表 土器観察表

No.	地点	種別	輪郭 形状	口径	寸法 底径	器高	残存度	口縁 直線	成形・調整等		実測 番号	注記
									外面	内面		
1	360住	須恵器	杯A	12.9	6.3	3.5	3/6	完	ロクロナゲ、回転糸切	ロクロナゲ	360住3	360住031
2	360住	須恵器	蓋B	13.6	—	—	1/8	—	ロクロナゲ、回転ケズリ	ロクロナゲ	360住4	360住003
3	360住	土師器	美B	22.8	—	—	—	—	緩ハケメ、ヨコナデ	カキメのち緩工具ナデ	360住1	360住018、361住049
4	360住	土師器	美B	—	6.8	—	—	1/6	緩ハケメ、底面ナデ	緩の工具ナデ	360住2	360住006
5	360住	須恵器	美A	—	—	—	—	一部	ロクロナゲ	ロクロナゲ	360住5	360住012
6	361住	黒色A	杯A II	13	5.6	3.7	—	完	ロクロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	361住1	361住009
7	361住	黒色A	杯A II	14.2	6.6	3.8	1/4	1/5	ロクロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	361住3	361住047
8	361住	黒色A	杯A II	12.6	5.4	4.3	1/4	1/4	ロクロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	361住2	361住074-079
9	361住	黒色A	杯A I	16.6	7.2	5.3	1/2	一部	ロクロナゲ、手持ちケズリ	ミガキのち黒色処理	361住5	361住060-072
10	361住	黒色A	杯A I	—	7.4	—	—	1/4	ロクロナゲ、回転糸切のちケズリ	ミガキのち黒色処理	361住4	361住076-079
11	361住	須恵器	杯A	14	6.4	4	—	完	ロクロナゲ、回転糸切	ロクロナゲ	361住9	361住057
12	361住	須恵器	杯A	13.4	6	3.7	1/4	1/5	ロクロナゲ、回転糸切	ロクロナゲ	361住10	361住076
13	361住	須恵器	杯A	13	—	—	—	一部	ロクロナゲ	ロクロナゲ	361住11	361住073
14	361住	須恵器	杯A	6.2	—	—	—	1/2	ロクロナゲ、回転糸切	ロクロナゲ	361住13	361住079
15	361住	須恵器	杯A	7.2	—	—	—	1/4	ロクロナゲ、回転糸切、ヘラ記号	ロクロナゲ	361住12	361住072
16	361住	土師器	甕C	23	—	—	1/5	—	コナゲ、横ケズリ、タタキメ状	ヨコナデ、工具ナデ	361住8	361住066-067
17	361住	土師器	甕B	20.2	—	—	1/5	—	コナゲ、緩ハケメ	カキメ、工具ナデ	361住7	361住059-072
18	361住	土師器	蓋	17	—	—	1/10	—	コナゲ、ミガキ?	ヨコナデ、ミガキ	361住6	361住076
19	361住	須恵器	長頸蓋	4.2	—	—	—	—	ロクロナゲ	ロクロナゲ	361住14	361住079
20	361住	須恵器	長頸蓋	—	5.2	—	—	2/3	ロクロナゲ、回転ケズリ、付高台	ロクロナゲ	361住15	361住076
21	362住	黒色A	杯A II	13	5.6	4	1/2	1/2	ロクロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住1	362住096-117-172-183
22	362住	黒色A	杯A II	13	—	—	1/4	—	ロクロナゲ	ミガキのち黒色処理	362住3	362住178-179
23	362住	黒色A	杯A II	13.2	6.8	3.8	4/5	完	ロクロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住2	362住101
24	362住	黒色A	杯A II	13.1	5.4	3.85	1/3	完	ロクロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住3	362住173
25	362住	黒色A	杯A II	13.6	6	3.9	1/3	7/8	ロクロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住9	362住093-179-196
26	362住	黒色A	杯A II	12.4	—	—	1/4	—	ロクロナゲ	ミガキのち黒色処理	362住6	362住179
27	362住	黒色A	杯A II	—	5.4	—	—	1/4	ロクロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住7	362住179
28	362住	黒色A	杯A II	12.35	5.1	3.95	1/8	完	ロクロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住4	362住174-187
29	362住	黒色A	杯A II	12.9	6.2	4	1/2	1/2	ロクロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住8	362住110-178
30	362住	黒色A	杯A II	—	6.4	—	—	1/4	ロクロナゲ、回転糸切、墨華	ミガキのち黒色処理	362住24	362住183
31	362住	黒色A	杯A II	—	5.8	—	—	1/4	ロクロナゲ	ミガキのち黒色処理	362住26	362住186
32	362住	黒色A	杯A I	16.2	—	—	—	1/4	ロクロナゲ	ミガキのち黒色処理	362住11	362住098
33	362住	黒色A	杯A I	16.2	—	—	—	1/6	ロクロナゲ	ミガキのち黒色処理	362住10	362住184
34	362住	黒色A	杯A I	19.6	8	5.5	3/8	1/12	ロクロナゲ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	362住12	233-240-279-281-286
35	362住	黒色A	鉢	22.4	—	—	1/6	—	ロクロナゲ	ミガキのち黒色処理	362住15	362住178
36	362住	黒色A	皿B	13.05	7	2.95	5/8	完	ロクロナゲ、回転糸切、付高台	ミガキのち黒色処理	362住13	362住092-104
37	362住	黒色A	皿B	13.1	6.4	2.55	1/2	完	ロクロナゲ、回転糸切、付高台、刷字	ミガキのち黒色処理	362住14	362住102
38	362住	土師器	盤A	32.2	—	—	1/12	—	ロクロナゲ	ロクロナゲ	362住23	362住194
39	362住	須恵器	杯A	13.4	5.4	3.75	1/4	完	ロクロナゲ、回転糸切	ロクロナゲ	362住31	362住165-178-190-193
40	362住	須恵器	杯A	13	5.1	3.25	3/8	1/2	ロクロナゲ、回転糸切	ロクロナゲ	362住30	362住180
41	362住	須恵器	杯A	13.05	5.1	3.4	2/3	完	ロクロナゲ、回転糸切	ロクロナゲ	362住28	362住087
42	362住	須恵器	杯A	13.8	7.6	3.2	3/8	1/2	ロクロナゲ、回転糸切	ロクロナゲ	362住29	362住183-187
43	362住	須恵器	杯A	13	6.4	3.9	1/8	1/2	ロクロナゲ、回転糸切、底面ハケメ工具ナデ?	ロクロナゲ	362住32	362住144
44	362住	須恵器	杯A	12.8	6.6	3.85	1/10	1/4	ロクロナゲ、回転糸切	ロクロナゲ	362住33	362住180
45	362住	須恵器	杯A	12.8	6.8	3.9	僅	1/10	ロクロナゲ、回転糸切	ロクロナゲ	362住34	362住180

No.	地点	種別	基礎形状	寸法			積存度	開口	成形・調整等		実測	注記	
				口径	底径	器高			底部	外面			内面
46	362住	須臾器	杯A	13.7	6.4	4.1	3/4	完	ロクロナデ, 回転糸切	ロクロナデ	362住35	362住100	
47	362住	須臾器	杯A						ロクロナデ	ロクロナデ	362住27	362住193	
48	362住	須臾器	無B	17.8				1/4	ロクロナデ, 回転ケズリ	ロクロナデ	362住36	362住182-183	
49	362住	土師器	小器D	8.8	5.3	8.1		完	完	ロクロナデ, カキメ, 回転糸切	口縁カキメ, ロクロナデ	362住16	362住127
50	362住	土師器	小器D	13.4	6.8	15.1	1/4	1/3	縦ハケメ, 工具ナデ		362住17	362住105-107-115-170-178-179-181	
51	362住	土師器	甕B	22.4				1/3	縦ハケメ		362住22	362住088-091-094-163-172-193	
52	362住	土師器	甕B	21.2				1/3	縦ハケメ		362住20	362住149-168-179-193	
53	362住	土師器	甕B	20.6				1/4	縦ハケメ		362住21	362住175-179	
54	362住	土師器	甕B	15.9				1/2	縦ハケメ		362住18	362住146-147-152-154-155-174-183	
55	362住	土師器	甕B	21					縦ハケメ		362住19	362住113-129-130-149-151-168-178-179-187-365住99	
56	362住	須臾器	長柄煮						ロクロナデ		362住38	362住089-111-121-150-167-177-178-186-191-193	
57	362住	須臾器	甕D	18.3				1/6	ロクロナデ		362住27	362住178-190-196	
58	362住	須臾器	?					1/12	ロクロナデ		362住40	362住179	
59	362住	須臾器	?					1/16	ロクロナデ		362住39	362住168-177	
60	363住	黒色A	杯A I	16.25	6.6	5.75	1/3	5/6	ロクロナデ, 回転糸切		363住1	362住181-193-363住206-219	
61	363住	黒色A	杯A II	13.7	6.5	4.2		完	ロクロナデ, 回転糸切のうち尖角工具ナデ		363住2	363住207-219-221-227	
62	363住	須臾器	杯A	12.4	6	4.05	2/5	1/5	ロクロナデ, 回転糸切		363住4	363住181-219-227	
63	363住	須臾器	杯A	15	7.3	4	1/14	僅	ロクロナデ, 手持ケズリ		363住5	363住224	
64	363住	須臾器	杯B	12.6					ロクロナデ		363住3	363住221	
65	363住	須臾器	杯B		9			1/2	ロクロナデ, 回転ケズリ		363住6	363住199-227	
66	363住	須臾器	無B	14.2				1/13	ロクロナデ, 回転ケズリ		363住7	363住223	
67	363住	土師器	小器D	12.2					ロクロナデ, カキメ		363住8	363住181-202-219-227-229-843	
68	363住	土師器	甕B	25				1/9	縦ハケメ		363住9	363住219-227-229-230	
69	363住	須臾器	甕						ロクロナデ		363住10	363住200-215	
70	363住	須臾器	甕C	16				1/10	ロクロナデ		363住11	363住198	
71	364住	黒色A	杯A I	16.8	7	4.7	5/8	完	ロクロナデ, 回転糸切		364住1	364住156-267	
72	364住	黒色A	杯A II	12.2	5.8	3	1/6	3/8	ロクロナデ, 回転糸切		364住2	364住232	
73	364住	黒色A	杯A I	15.4	7.2	4.4	1/3	2/3	ロクロナデ, 回転糸切		364住2	364住243-253	
74	364住	黒色A	杯A I	15.8				1/12	ロクロナデ		364住5	364住281	
75	364住	黒色A	杯A I	17.6				1/8	ロクロナデ		364住4	364住277	
76	364住	黒色A	杯A I		7.8			1/4	ロクロナデ, 回転糸切		364住6	364住273	
77	364住	須臾器	杯A	12.8				1/12	ロクロナデ		364住11	364住286	
78	364住	須臾器	杯A	13.6	6.2	3.3	1/4	1/2	ロクロナデ, 回転糸切		364住13	364住294	
79	364住	須臾器	杯A	13.1	6.2	3.8	1/2	4/5	ロクロナデ, 回転糸切		364住12	362住178-364住247-278-4-1719	
80	364住	須臾器	杯A	14	7.2	4		僅	ロクロナデ, 回転糸切		364住14	364住272	
81	364住	須臾器	杯A		6.2			1/2	ロクロナデ, 回転糸切		364住15	362住190-364住244	
82	364住	須臾器	鉢	12.8				1/8	ロクロナデ		364住16	364住280	
83	364住	土師器	鉢					1/10	縦ハケメ		364住8	364住236-275	
84	364住	土師器	小器D		8			完	ロクロナデ, カキメ, 回転糸切		364住7	364住250	
85	364住	土師器	甕B	24.8				1/12	縦ハケメ		364住9	364住236-237-267-288	
86	364住	土師器	甕B		11.4			1/12	縦ハケメ, 底面ナデ		364住10	364住238-241-267	
87	364住	須臾器	長柄煮	18.2				僅	ロクロナデ		364住17	364住276	
88	365住	須臾器	杯B	13.8	9	3.5	1/6	1/5	ロクロナデ, 回転ケズリ		365住2	365住290	
89	365住	須臾器	甕B	16				1/14	ロクロナデ, 回転ケズリ		365住1	365住300-301	
90	365住	須臾器	甕A	23.5				1/8	タタキのちロクロナデ		365住3	363住229-365住298	
91	365住	須臾器	甕A	27.6				1/5	ロクロナデ, 煮炊紋		365住5	365住300	
92	365住	須臾器	甕A	26.9				1/5	ロクロナデ, タタキ		365住4	365住293	
93	366住	土師器	甕B	20.8				1/12	縦ハケメ		366住1	366住305	
94	366住	土師器	甕B		8.4			1/3	縦ハケメ, 底面ナデ		366住2	366住305	
95	367住	黒色A	杯A I	16.8	7.6	5.7	1/8	1/3	ロクロナデ, 回転糸切		367住2	367住351	
96	367住	須臾器	杯A	12.7	6	3.2	3/4	完	ロクロナデ, 回転糸切		367住10	367住342-343-350-352	
97	367住	須臾器	杯A	12.8				1/6	ロクロナデ		367住1	367住351-358-361	
98	367住	須臾器	杯A	13.2	6.2	3.1	1/4	1/2	ロクロナデ, 回転糸切		367住11	367住355-363	
99	367住	須臾器	杯A	12.9	5.6	3	2/3	完	ロクロナデ, 回転糸切		367住8	367住339-340-352	
100	367住	須臾器	杯A	14.4	6	4.1	1/2	完	ロクロナデ, 回転糸切		367住9	367住324-328-335-346-347	
101	367住	須臾器	甕	15.6				1	ロクロナデ		367住12	367住355	
102	367住	土師器	小器D	10.4				僅	ロクロナデ, カキメ		367住3	367住356	
103	367住	土師器	甕B	21.6				1/12	ヨコナデ, 斜ハケメ		367住5	367住337-338-353	
104	367住	土師器	甕B		7.6			4/5	縦ハケメ, 底面ナデ		367住6	367住335-359	

№	地点	種別	飾形 器形	寸法 口径 口径 器高	残存度 口縁 底部	形状・調整等	裏面	裏面 番号	注記		
105	367住	土師器	甕	25.2		1/3	縦ハケメのちロクロナデ	縦ハケメ	367住4	367住315・325・329・333・336・346・347	
106	367住	土師器	甕B	8.6		1/3	縦ハケメのち粘土塗布上下具ナデ	縦ハケメ	367住7	367住323・331・334・374住708	
107	367住	須恵器	甕A	31		一部	ロクロナデ	ロクロナデ	367住13	367住351・噴出面850	
108	368住	黒色A	鉢	16.4	9.6 5.2	1/3	光 ロクロナデ、手持ケズリのちミガキ、口縁磨	細かいミガキのち黒色処理	368住1	368住365・366・370・373・387・393・398	
109	368住	須恵器	杯	11.8		1/10	ロクロナデ	ロクロナデ	368住9	368住110	
110	368住	須恵器	杯	12		1/8	ロクロナデ	ロクロナデ	368住10	368住414	
111	368住	須恵器	杯	12.4		1/12	ロクロナデ	ロクロナデ	368住11	368住309	
112	368住	須恵器	杯B	12	9.2 3.6	1/4	1/3 ロクロナデ、回転糸切のち回転ケズリ	ロクロナデ	368住6	368住372・404	
113	368住	須恵器	杯B	14.4		1/12	ロクロナデ	ロクロナデ	368住8	368住385	
114	368住	須恵器	杯B	15.8	10.6 5.3	1/16	1/4 ロクロナデ、回転糸切のち回転ケズリ	ロクロナデ	368住7	368住368	
115	368住	須恵器	楕A	13.8		1/10	ロクロナデ	ロクロナデ	368住12	368住418	
116	368住	須恵器	蓋B	14	—	3/4	—	ロクロナデ、回転ケズリ、沈磨	ロクロナデ	368住4	368住384・397・399・402・409
117	368住	須恵器	蓋B	—	—	—	—	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	368住5	368住380・388・390・401・407・410・411
118	368住	土師器	小甕B	6.4		1/3	横ハケメ	工具ナデ	368住3	368住420	
119	368住	土師器	甕B	19.6		1/7	斜〜縦ハケメ	口縁ハケメ、工具ナデ	368住2	368住382	
120	369住	須恵器	杯A	13.8		1/6	ロクロナデ	ロクロナデ	369住7	369住381・369住437	
121	369住	須恵器	杯B	12.4		1/8	ロクロナデ	ロクロナデ	369住8	369住336	
122	369住	須恵器	杯B	11.6		1/2	ロクロナデ、底面ナデ	ロクロナデ	369住10	369住436	
123	369住	須恵器	杯B	10.6	7.2 4.2	7/8	完 ロクロナデ、回転糸切のち回転ケズリ	ロクロナデ	369住5	369住431	
124	369住	須恵器	杯B	12.3	9.1 3.6	1/2	1/2 ロクロナデ、回転糸切のち回転ケズリ	ロクロナデ	369住11	369住428・430・440	
125	369住	須恵器	杯B	12.8	9.6 3.9	1/4	1/4 ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	369住6	369住432	
126	369住	須恵器	蓋B	15.8	—	1/8	—	ロクロナデ	ロクロナデ	369住4	369住444
127	369住	土師器	甕A	18.2		1/8	—	ヨコナデ、ハケメ、工具ナデ	ハケメ	369住2	369住440
128	369住	土師器	甕B					縦ハケメ、工具ナデ	工具ナデ	369住3	369住427・433・436・440
129	369住	土師器	甕B	9		4/5	縦ハケメ、底面ナデ	工具ナデ	369住1	369住424・425・440	
130	369住	須恵器	蓋	9.4		1/3	1/3 ロクロナデ、回転糸切、胴部回転ケズリ	ロクロナデ	369住9	369住429	
131	370住	黒色A	杯A	15.9	7.6 4.3	1/18	1/8 ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	370住1	370住467	
132	370住	須恵器	杯A	8.3		2/5	2/5 ロクロナデ、回転ヘラ切	ロクロナデ	370住2	370住457・487	
133	370住	須恵器	無B	15.4	— 3.6	1/8	—	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	370住3	370住463・492
134	370住	須恵器	蓋B	16.3	— 3.1	3/4	—	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	370住4	370住460・474・481・486
135	370住	土師器	甕	25.3		1/16	1/16 縦ハケメのちロクロナデ	縦ハケメのちナデ	370住8	370住461	
136	370住	土師器	甕	22.8		1/8	1/8 口縁ヨコナデ、胴部タタキのち縦工具ナデ	全面的にカキメ	370住9	370住465・464・468・475・483・484・490	
137	370住	須恵器	甕A	22.4		3/4	3/4 ロクロナデ、胴部タタキ	ロクロナデ、胴部当具板	370住5	370住449・450・451・452・455・478	
138	370住	須恵器	甕B	33.4		1/4	1/4 ロクロナデ、胴部タタキ	ロクロナデ	370住6	370住482・470	
139	370住	須恵器	甕	14		1/21	1/21 タタキ	当具板ナデ、工具ナデ	370住7	370住482	
140	371住	土師器	甕A	11.6		1/14	1/14 ヨコナデ、ナデ	工具ナデ	371住1	371住497	
141	371住	土師器	甕A	9		1/3	1/3 ナデ、底面不要圧痕	ナデ摩滅	371住2	371住500	
142	372住	土師器	杯	11.6	— 4.8	5/6	5/6 ヨコナデ、手持ケズリ	ヨコナデ、ナデ	372住1	372住538・539	
143	372住	土師器	杯	12.8	— 1.8	一部	一部 ヨコナデ、手持ケズリ	ヨコナテ、ナデ	372住3	372住532	
144	372住	土師器	杯	13.6	— 4.9	1/2	5/6 ヨコナテ、ミガキ、手持ケズリ	細かいミガキ	372住2	372住515・519・522	
145	372住	土師器	杯	12.6	—	1/8	1/8 ヨコナテ、手持ケズリ	ミガキのち黒色処理	372住6	372住539・546	
146	372住	土師器	杯	13.6	—	1/14	1/14 ヨコナテ、手持ケズリ	ミガキのち黒色処理	372住5	372住535	
147	372住	土師器	杯	12.4	—	1/12	1/12 ヨコナテ、手持ケズリ	ミガキのち黒色処理	372住4	372住545	
148	372住	土師器	鉢	25	—	1/4	1/4 ヨコナテ、工具ナデ	細かいミガキ	372住9	372住514	
149	372住	須恵器	杯蓋	12.1	— 4.2	一部	一部 ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	372住13	372住513	
150	372住	土師器	甕	14.8		1/6	1/6 ヨコナテ、工具ナデ	工具ナデ	372住8	372住539・27上778	
151	372住	土師器	鉢	19.6		1/4	1/4 ヨコナテ、ケズリのちミガキ	ミガキのち黒色処理	372住7	372住531・542・546	
152	372住	土師器	蓋	13.4		一部	一部 ヨコナテ、縦ミガキ	横ミガキ	372住11	372住525・527・539・543・545	
153	372住	土師器	蓋	27.6		一部	一部 ヨコナテ、工具ナデ、ミガキ	工具ナテ、横ミガキ	372住10	372住525	
154	372住	土師器	蓋	20		一部	一部 ヨコナテ	横ミガキ	372住12	372住531・539	
155	372住	須恵器	甕	22.2		1/8	1/8 ロクロナデ、胴部タタキ	ロクロナデ、同心四角当具板	372住14	372住525・530・534・537・27上764・765・767・769・770・771・784・783	
156	373住	土師器	杯	17	12.6 2.6	5/12	1/2 ヨコナテ、底面手持ケズリ	ヨコナテ、斜放射暗文	373住1	373住531・373住650・654・666・669・679・681・690・691	
157	373住	土師器	杯蓋	12.2		一部	一部 ヨコナテ	ミガキのち黒色処理	373住2	373住653	
158	373住	須恵器	杯蓋	10.6	—	1/12	1/12 ロクロナテ	ミガキのち黒色処理	373住28	373住658	
159	373住	須恵器	杯蓋	12		1/6	1/6 ロクロナテ、天井回転ケズリ	ロクロナテ	373住27	373住661	
160	373住	須恵器	杯蓋	19		1/4	1/4 ロクロナテ	ロクロナテ	373住26	373住667・668	
161	373住	須恵器	杯A	14.6	7 4.7	2/3	完 ロクロナデ、ヘラ切のち手持ケズリ	ロクロナデ	373住32	373住605・655	



№	地点	種別	普通器形	寸法		残存度		成形・調整等		実測番号	注記
				口径	底径	器高	口縁	底面	外面		
162	373住	須恵系	杯A	13.8	6.6	4.1	1/4	1/2	ロクロナデ、底部工具ナデ	ロクロナデ	373住39 373住663
163	373住	須恵系	杯A	12.4	7.2	3.7	1/8	1/2	ロクロナデ、底部手持ケズリ	ロクロナデ	373住31 373住684
164	373住	須恵系	杯A	10.8				1/5	ロクロナデ、底部工具ナデ	ロクロナデ	373住29 373住646
165	373住	須恵系	杯A	11.6	7.2	2.2	1/8	一部	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	373住46 373住669
166	373住	須恵系	杯A		9			1/4	ロクロナデ、底部工具ナデ、ヘラ記号	ロクロナデ	373住47 373住662
167	373住	須恵系	杯A	13.6	7.6	3.4	5/12	1/2	ロクロナデ、回転ヘラ切のちナデ	ロクロナデ	373住36 373住623
168	373住	須恵系	杯A	14.2				1/6	ロクロナデ	ロクロナデ	373住44 373住662-671
169	373住	須恵系	杯A	13.6				1/8	ロクロナデ	ロクロナデ	373住42 373住663-665
170	373住	須恵系	杯A	14				1/8	ロクロナデ	ロクロナデ	373住41 373住684-685
171	373住	須恵系	杯A	13.6	6.2	3.6	1/8	1/3	ロクロナデ、回転ヘラ切のちナデ	ロクロナデ	373住37 373住608-657
172	373住	須恵系	杯A	13.8	8.6	4.1	完	完	ロクロナデ、ヘラ切のち工具ナデ	ロクロナデ	373住33 373住584-600-655
173	373住	須恵系	杯A	13.6	6.3	3.7	1/4	完	ロクロナデ、回転ヘラ切のちナデ	ロクロナデ	373住35 373住566-658-688-689
174	373住	須恵系	杯A	13.2	6.6	4.4	1/4	完	ロクロナデ、ヘラ切のち工具ナデ	ロクロナデ	373住34 373住557
175	373住	須恵系	杯A	12.6	6.4	4.2	1/5	1/3	ロクロナデ、底部工具ナデ	ロクロナデ	373住38 373住662
176	373住	須恵系	杯A	13.4				1/8	ロクロナデ	ロクロナデ	373住43 373住666
177	373住	須恵系	杯A	14	7.6	4.2	一部	1/5	ロクロナデ、底部工具ナデ	ロクロナデ	373住40 373住688
178	373住	須恵系	杯A		9			1/3	ロクロナデ、ヘラ切のち手持ケズリ	ロクロナデ	373住30 373住666
179	373住	須恵系	杯B	14				1/8	ロクロナデ	ロクロナデ	373住45 373住689
180	373住	須恵系	杯B	17.6				1/10	ロクロナデ	ロクロナデ	373住56 373住690
181	373住	須恵系	杯B	17.4	12	6.8	2/5	2/3	ロクロナデ、底面回転ケズリ、ヘラ記号	ロクロナデ	373住50 373住553
182	373住	須恵系	杯B	11.6	8.6	3.25	一部	1/2	ロクロナデ、底面回転ケズリ	ロクロナデ	373住56 373住653-656-667
183	373住	須恵系	杯B	15.1	10.7	4.05	7/8	完	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住48 373住615
184	373住	須恵系	杯B	15.6	11	3.9	一部	完	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住52 373住577-666
185	373住	須恵系	杯B	14.8	11.0	4	1/8	1/4	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住54 373住638
186	373住	須恵系	杯B	14.4	10.6	3.9	1/2	1/2	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住53 373住634-665
187	373住	須恵系	杯B	15.5	11.8	3.7	一部	7/8	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住57 373住662-671-672
188	373住	須恵系	杯B	15	10.6	4.1	3/8	完	ロクロナデ、回転ケズリのち工具ナデ	ロクロナデ	373住51 373住562-662-665
189	373住	須恵系	杯B	14.1	10.6	4.15	1/2	完	ロクロナデ、回転ケズリのち工具ナデ	ロクロナデ	373住49 373住564-647-655-662
190	373住	須恵系	蓋B	17.4	6.4	2.5	1/3	—	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	373住22 373住560
191	373住	須恵系	蓋B	16.2	—	3.4	3/8	—	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住25 373住573-574-653
192	373住	須恵系	蓋B	16.2	—	3.8	5/8	—	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住23 643-648-653-654-663-680
193	373住	須恵系	蓋B	16.2	—	3.2	1/2	—	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	373住24 373住641
194	373住	須恵系	無須成	11				一部	ロクロナデ	ロクロナデ	373住58 373住567
195	373住	土師器	小空罎	10.2				1/6	ヨコナゲ、横ケズリ	ヨコナゲ、横ハケメ	373住4 373住607
196	373住	土師器	小空罎					1/3	ナゲ摩盤	工具ナデ	373住7 373住662-665
197	373住	土師器	罎	8				4/5	ハケメ、表面ハケメ	ハケメ	373住16 373住688
198	373住	土師器	小空罎	14.6				1/10	ヨコナゲ	ヨコナゲ、カキメ?	373住5 373住655
199	373住	土師器	罎A	13.6				1/6	ヨコナゲ、工具ナデ	指頭生産、工具ナデ	373住6 373住688-686
200	373住	土師器	罎A	15.4				1/6	ヨコナゲ、縦横ハケメ	カキメ、工具ナデ	373住19 373住638
201	373住	土師器	小空罎	14.6				1/4	ロクロナデ、カキメ	ハケメ	373住13 373住666
202	373住	土師器	小空罎	18.2				1/2	ハケメのちカキメ	カキメ	373住8 373住660-662-665-680-681
203	373住	土師器	罎B	19.4				一部	ヨコナゲ、縦ハケメ	口縁横ハケメ、工具ナデ	373住20 373住667
204	373住	土師器	罎A	23.4				1/6	ヨコナゲ	ヨコナゲ	373住21 373住647
205	373住	土師器	罎A	23.6				1/6	ヨコナゲ、縦ハケメ	ヨコナゲ、工具ナデ	373住17 373住678-691
206	373住	土師器	罎G	23.6				1/10	ヨコナゲ、口縁増部に辻縁	ヨコナゲ、工具ナデ	373住18 373住609
207	373住	土師器	罎B	21.6				1/6	ヨコナゲ、縦ハケメ	ヨコナゲ、横工具ナデ	373住10 373住597
208	373住	土師器	罎B	20.2				1/5	ヨコナゲ、縦ハケメ	ヨコナゲ、横工具ナデ	373住11 373住596-644
209	373住	土師器	罎B	19.8				1/2	ヨコナゲ、縦ハケメ	ヨコナゲ、横工具ナデ、縦指ナゲ?	373住9 373住566-580-583-589-633-690
210	373住	土師器	罎B		7.4			1/3	縦ハケメ、下幅横ハケメ、底面ナデ	縦へ斜工具ナデ	373住14 373住548-554-556-600-612-614-619-648-650-655-669-679-680-691
211	373住	土師器	罎B		8.8			一部	縦ハケメ	縦へ斜工具ナデ	373住13 373住581-627-644
212	373住	土師器	罎G		11			1/2	縦ハケメ、底面ハケメ	縦ハケメ	373住15 373住655-665-681-690-691
213	373住	土師器	罎G		13.2			完	縦ハケメ、底面ナデ	縦ハケメ	373住12 373住547-580-592-600-612-614-619-648-650-655-669-679-680-691
214	373住	須恵系	罎C	31.6				1/6	ヨコナゲ、タタキ	ヨコナゲ、工具ナデ	373住60 373住621
215	373住	須恵系	罎E	31.8				1/6	ヨコナゲ、タタキ	ヨコナゲ、工具ナデ	373住59 373住695-647
216	373住	須恵系	杯A	12.4	6.2	3.6	1/6	1/8	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	374住1 374住693-714
217	374住	須恵系	杯A		6.6			1/4	ロクロナデ、回転糸切	ミガキのち黒色処理	374住2 374住714
218	374住	須恵系	杯A	12.8				1/10	ロクロナデ	374住6 374住712	
219	374住	須恵系	罎B?	12.2				1/8	ロクロナデ	ロクロナデ	374住7 374住712
220	374住	須恵系	罎B	18.8				1/6	縦ハケメ	口縁カキメ、工具ナデ	374住3 374住710-711
221	374住	土師器	罎B		9			1/4	縦ハケメ、表面ナデ	縦ハケメ、工具ナデ	374住4 374住713
222	374住	土師器	罎B		9			1/4	縦ハケメ、表面ナデ	縦指ナゲ、工具ナデ	374住5 374住712

No.	地点	種別	器種	寸法			残存度		成形・調整等		実測 番号	注記
				口径	口径	器高	口縁	底縁	外面	内面		
223	4上	黒色A	杯A B	11.7	4.7	3.45	1/5	1/4	ロクロナデ、 回転糸束	ミガキのち黒色処理	4上1	4上718
224	4上	黒色A	杯A T	15			1/6		ロクロナデ	ミガキのち黒色処理	4上2	4上717
225	4上	黒色A	杯A I	15.5			1/8		ロクロナデ	ミガキのち黒色処理	4上3	4上720
226	4上	土師器	高杯						ナデ	胴内工具ナデ	4上5	4上717
227	4上	土師器	小器	8.6			1/4		カキメ、回転糸切	ロクロナデ	4上4	4上722
228	9上	須恵器	杯A	4.9			完		ロクロナデ、 回転糸束	ロクロナデ	9上1	9上745
229	9上	須恵器	杯B	12.7	8.9	3.35	1/12		ロクロナデ	ロクロナデ	9上2	9上746
230	9上	土師器	小器	12.1			1/8		ロクロナデ、 カキメ	ロクロナデ	9上3	9上745
231	9上	土師器	羹B	10			1/12		縦ハケメ、 底面ナデ	摩滅不明	9上4	9上727・733・735・745
232	24上	須恵器	杯A	12.6			1/6		ロクロナデ	ロクロナデ	24上2	24上758
233	24上	須恵器	杯A	12.7	8.25	4.7	完		ロクロナデ、 静止ヘリ切のち 縦線状工具ナデ	ロクロナデ	24上1	24上754
234	24上	須恵器	杯A	14	8.55	3.75	2/3	5/6	ロクロナデ、 回転ケズリ、ヘリ 記号	ロクロナデ	24上3	24上755・757
235	27上	須恵器	杯産	11.7	-	3.7	1/3	-	ロクロナデ、 ヘリ切本調整	ロクロナデ	27上3	372住536・27上774・ 779
236	27上	土師器	鉢	15	8.9	12.5	1/3	完	胴～底縁ケズリ、 胴下部縦ミガキ	工具ナデのち横ミガキ	27上1	27上780・782
237	27上	土師器	壺	14.55	11	15.5	1/2	完	ヨコナデ、 縦ハケメ、底縁ケズリ	横ハケメ、 横工具ナデ	27上2	27上772・773
238	3南	土師器	高杯						縦ミガキ	しぼり置、 横ケズリ	3南1	3南797
239	6南	土師器	杯B	10.5			2/3		横ミガキのち 黒色処理	横ミガキのち 黒色処理	6南1	6南805・815・818
240	6南	土師器	杯		5.5			9/10	ヨコナデ、 工具ナデ	横ミガキのち 黒色処理	6南2	815
241	6南	土師器	碗	10			1/10		ナデ	ナデ	6南4	810
242	6南	土師器	碗	11.8			1/6		ヨコナデ	ナデ	6南3	807
243	6南	須恵器	杯B	14			一部		ロクロナデ	ロクロナデ	6南9	813
244	6南	須恵器	杯B	15.2			1/8		ロクロナデ	ロクロナデ	6南10	813
245	6南	須恵器	杯B	15.2			1/4		ロクロナデ	ロクロナデ	6南11	807・812
246	6南	須恵器	高杯		9.8			1/4	ロクロナデ	ロクロナデ	6南12	809
247	6南	土師器	小器	12.2			1/8		口縁折返、 工具ナデ	工具ナデ	6南7	803
248	6南	土師器	羹G	22			1/6		ヨコナデ、 化粧土塗布	ヨコナデ	6南6	813
249	6南	土師器	羹A	24			1/10		ヨコナデ、 カキメ	ヨコナデ、 カキメ	6南8	810
250	6南	土師器	羹G		15.4			1/4	工具ナデ	工具ナデ	6南5	807
251	7南	須恵器	羹B	11.3	5.6	4.8	7/8	完	ロクロナデ、 タタキ	ロクロナデ	7南1	821
252	8南	須恵器	杯A	12			1/12		ロクロナデ	ロクロナデ	8南2	825
253	8南	須恵器	鉢	12.8			1/5		ロクロナデ	ロクロナデ	8南1	823
254	石積1	土師器	埴?	7.4			1/4		ヨコナデ、 化粧粘土塗布	ヨコナデ、 口縁除内削 ぎ、化粧粘土 塗布	石積1-1	828
255	東包倉	須恵器	杯A	13.4	6.5	4.15	1/16	1/2	ロクロナデ、 回転糸束	ロクロナデ	東包1	835
256	東輸出	須恵器	杯A		9.6			1/4	ロクロナデ、 回転ケズリ	ロクロナデ	東檢1	845
257	東輸出	土師器	羹C	21			1/6		ヨコナデ、 横ケズリ	ナデ	東檢2	845
258	東輸出	須恵器	羹A	43			1/14		ロクロナデ、 タタキ、 工具ナデ	ロクロナデ	東檢3	843
259	西輸出	土師器	杯	10.6			1/8		ヨコナデ、 横ミガキ	ヨコナデ、 横ミガキ	西檢1	868
260	西輸出	須恵器	杯B		11.5		1/3		ロクロナデ、 回転ケズリ	ロクロナデ	西檢2	861
261	西輸出	須恵器	蓋B	18	-	3.4	1/4	-	ロクロナデ、 回転ケズリ	ロクロナデ	西檢3	867
262	西輸出	須恵器	鉢A	10			1/4		ロクロナデ、 胴部回転ケズリ、 底面ナデ	ロクロナデ	西檢4	864

※種別の略称は「黒色A」が黒色土器A、「軟須恵」が軟質須恵器を指す。

第6表 石製品観察表

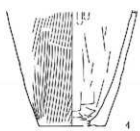
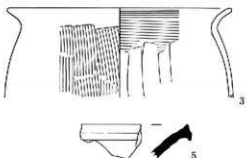
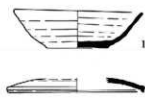
No.	出土地点	器種	石材	寸法 (mm)			重量 (g)	欠損状況	備考
				長さ	幅	厚さ			
1	364住床面	皿・磨石	砂岩	154.5	78.0	29.5	(541.0)	ほぼ完形	両面に凹、右側面が研磨。
2	367住覆土	砥石	砂岩	(109.0)	63.0	26.0	(316.5)	下平折損	研磨面2面、裏面に線状痕あり。
3	包倉側	剥片	チャート	17.2	9.4	3.3	0.5		

※寸法および重量で、欠損が認められるものを ( ) とし、残存値を表す。

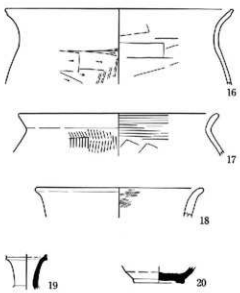
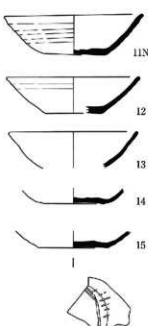
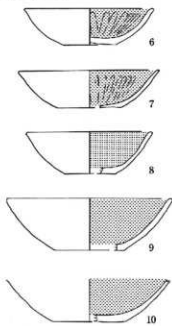
第7表 鉄製品観察表

No.	出土地点	器種	寸法 (mm)			重量 (g)	備考	ID
			最大長	最大幅	最大厚			
1	373住	刀子	143.4	13.2	5.6	11.7	床面出土。	6
2	373住	刀子	94.8	12.4	5.7	7.2	床面出土。	5
3	362住	ヤリガンナ	73.0	17.2	6.0	12.7	362住を切る攪乱出土。	2
	362住	不明	22.0	10.2	9.5	2.4		3
	363住	鉄塊	38.8	36.9	31.2	92.2	覆土上層より出土。	4

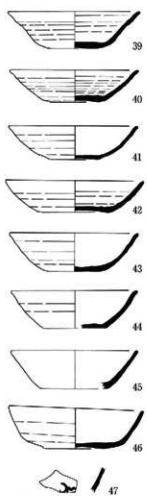
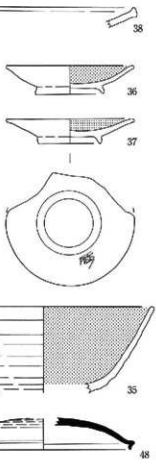
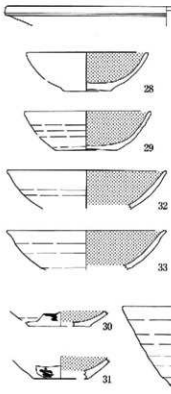
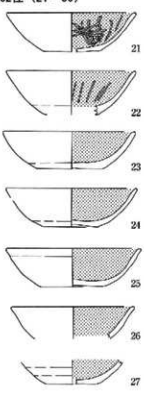
360住 (1~5)



361住 (6~20)

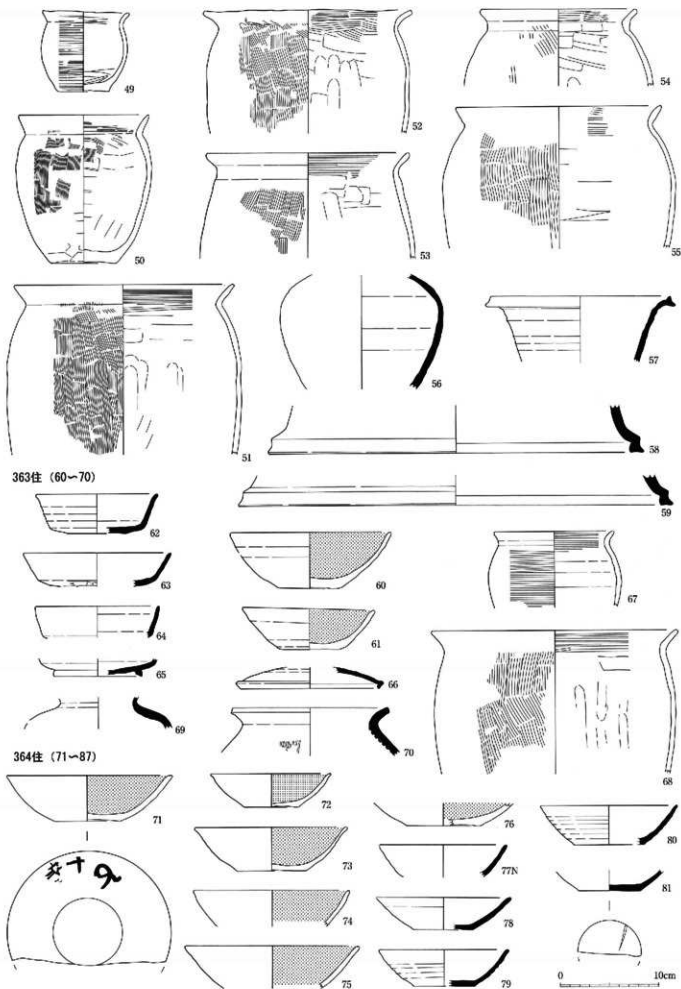


362住 (21~59)

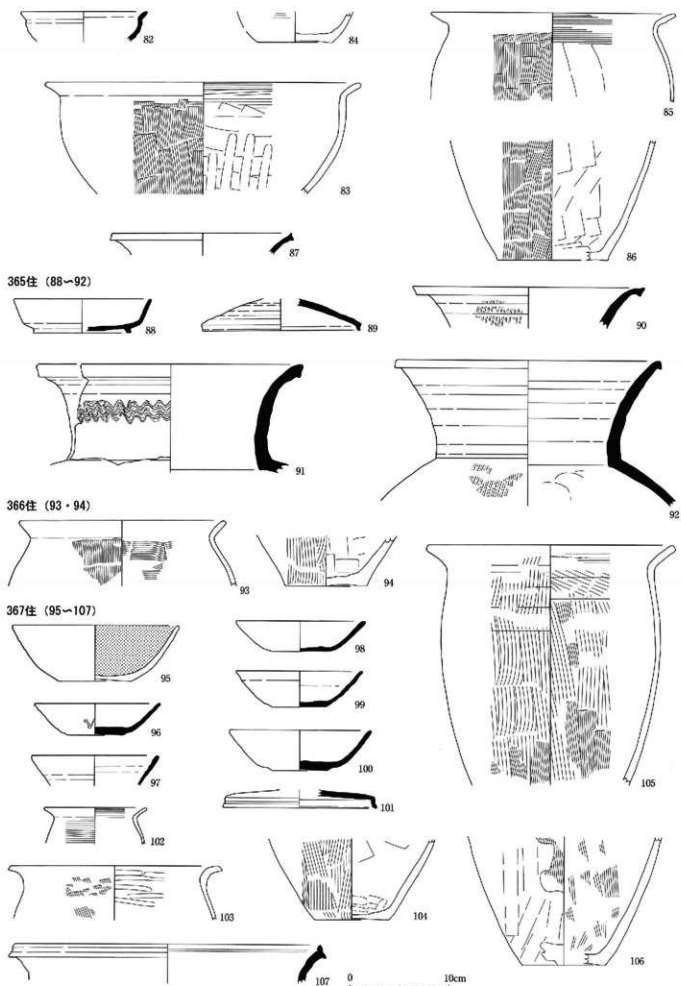


0 10cm

第15図 遺物(1)

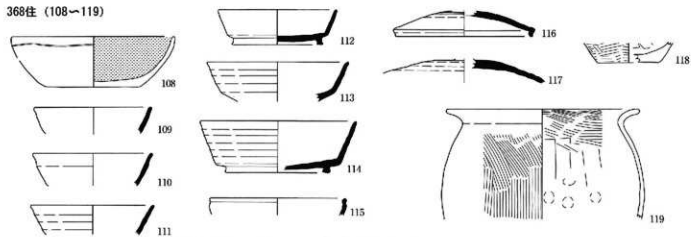


第16図 遺物 (2)

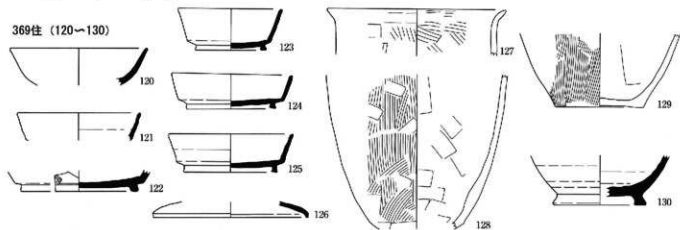


第17図 遺物 (3)

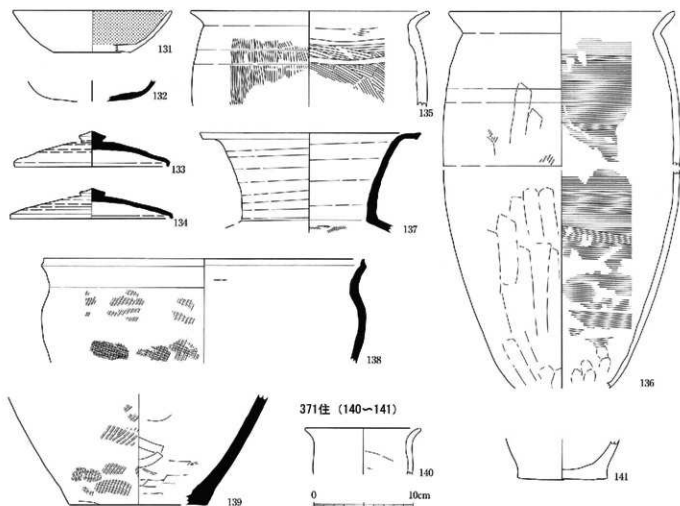
368住 (108~119)



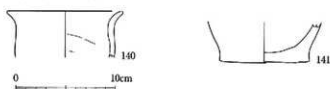
369住 (120~130)



370住 (131~139)

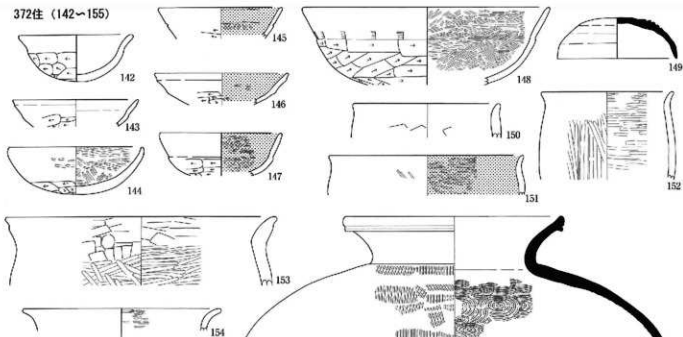


371住 (140~141)

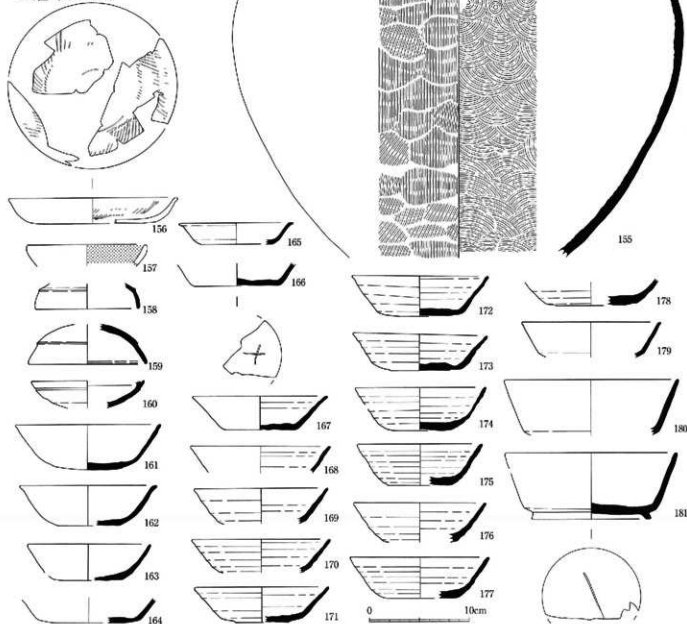


第18図 遺物(4)

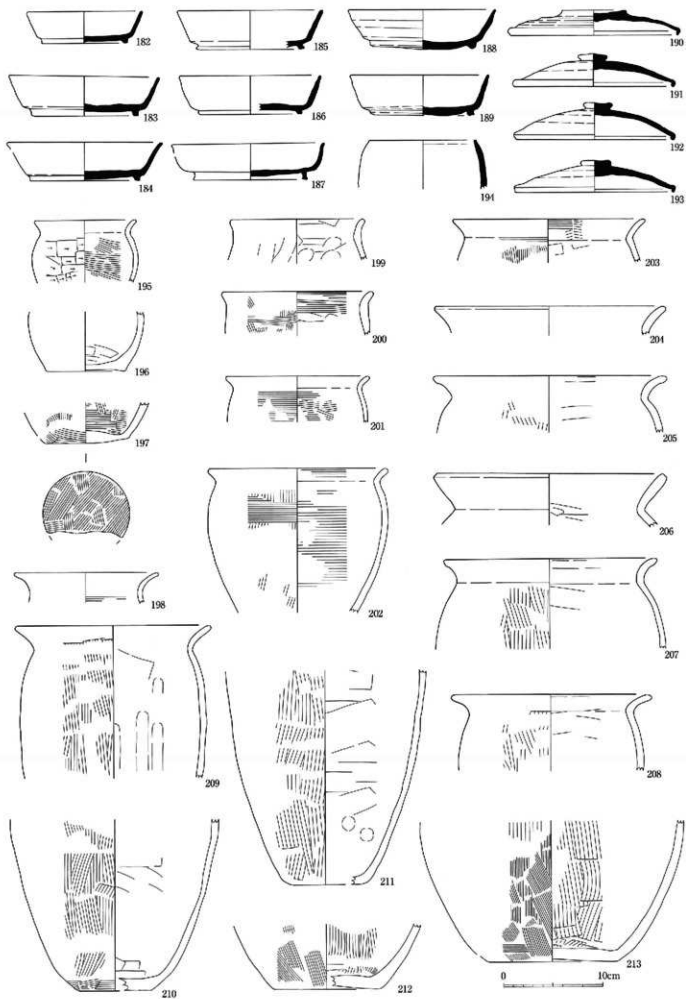
372住 (142~155)



373住 (156~215)

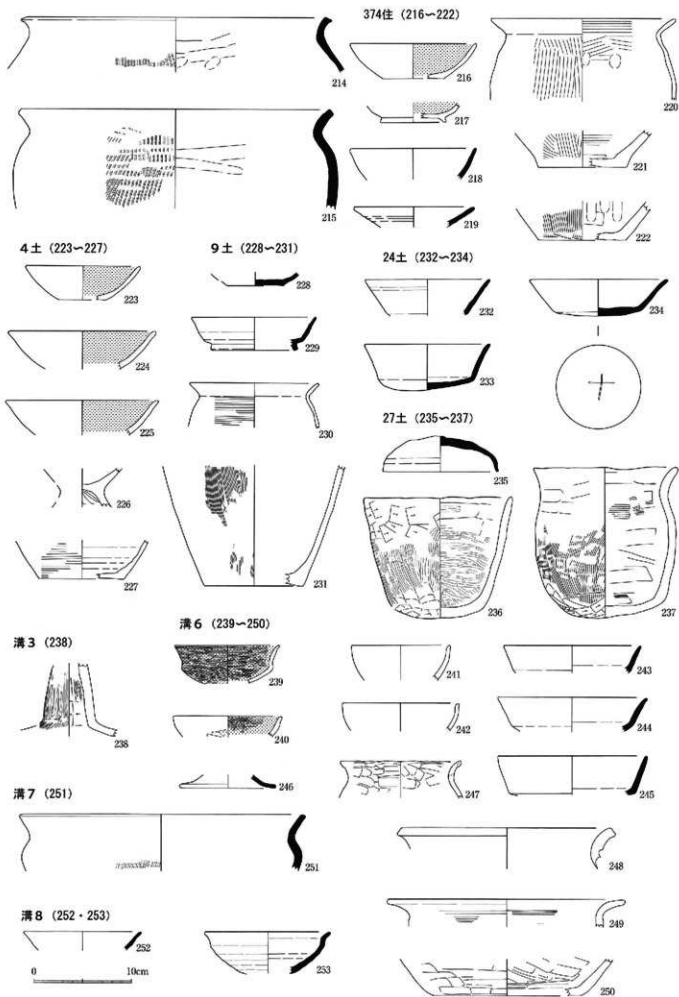


第19図 遺物 (5)



第20図 遺物(6)





第 21 図 遺物 (7)

石槌 1 (254)



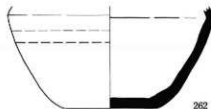
東区検出面 (256~258)



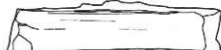
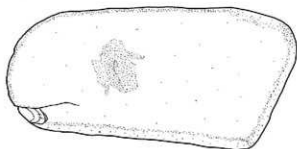
包含層 (255)



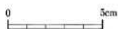
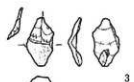
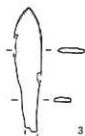
西区検出面 (259~262)



石製品



鉄製品



第22図 遺物(8)

## 第四章 総括

### 1 集落の変遷

今回の調査地点では、古墳時代後期から平安時代前期の集落を確認した。現代の攪乱により遺跡の大部分が破壊を受けており往時の状況を必ずしも明らかにはできないが、周辺の調査地点での成果を加え、調査成果を簡単にまとめておきたい。

確認できた竪穴住居址は古墳時代後期が2軒、奈良時代が4軒、奈良時代末～平安時代前期が9軒の計15軒である。全体的な傾向として、古墳時代後期（7世紀後半）は東区の溝3より西側、奈良時代（3～4期）も東区の西半から西区にかけて分布する。大型住居址の373住は西区の北西隅に位置する。東海産の須恵器や畿内系暗文杯などの搬入品が多量に出上し、床面積も61㎡以上とその他の住居址とは異なり集落内でも中核的な位置を占めていたと推測される。周囲には同時期の住居址や掘立柱建物址も確認できず、7～8世紀代に機能していたと考えられる溝6・7がその他の住居址と区画していた可能性がある。平安時代前期の9軒は東区東半に分布し、遺構も重複しながら集中している。今回の調査地から北東にかけて集落が広がっていたことが明らかである。主に5～7期の8世紀末から9世紀後半が主体であるが、住居の構築場所に規制があったのかもしれない。

### 2 石積遺構1

東区北東隅から拡張区にかけて検出された石積遺構1は、現代の攪乱や自然流路である溝2により破壊され、調査区外に続き全形がわからないなど、明らかにできなかった点が多い。遺構としての問題点は、断ち割り断面で確認したところ石積が整然としていないこと、溝2のラインと一致する箇所が多いことがあげられる。また、北に位置する平安時代前期の374住との直接的な切り合い関係は判然としにくい。374住は石積1の推定範囲内に位置すると考えられるが、検出レベルでは石積1の最も遺存状態が良い地点より約0.6m低く、374住がつくられた時期に石積1が埋没していたものなのか、直前で角を持ち東に曲がるものなのかは現段階では判断できない。

付近一帯の自然流路は南から北に向かって流れており、自然堆積物と考えた場合、流路方向に直交するように東西方向に伸びる南辺が不自然であり、ほぼ直角に曲がることから遺構として判断した。石積を覆うように粘質土層が堆積し、わずかであるが古墳時代前期の土器が出上ることなどから、奈良・平安時代より古い遺構である可能性がある。

今後、類例の増加や周辺の調査によって性格・時期の特定をしていきたい。

### 3 出川南遺跡における集落の展開

本遺跡はこれまでに14次にわたる発掘調査が実施されている。調査地点はJR篠ノ井線より東側と遺跡の北側、さらに今回の調査地点を含む南西部の3群に大きく分けることができる。本書では最もまとまった調査が行われている南西部を中心に、竪穴住居址の分布から集落の展開を簡単にまとめておきたい。

南西部では遺物集中などで古墳時代前～中期の遺物も出土しているが、竪穴住居址や掘立柱建物址などの明確な遺構は確認されていない。そのため、第23～25図ではまとまった遺構が確認できている古墳時代後期から平安時代前期までの限られた時期を対象としている。

まず、本遺跡で確認されている最も古い時代は弥生時代後期前半である。1次で1軒、6次で3軒、11次で1軒の住居址が確認されている。いずれもJR篠ノ井線より東の調査地で、地質学的な所見によれば、この一帯は田川の形成した基盤上の上っているようである。1次では、方形周溝墓の可能性もある土坑も確認されている。

古墳時代前期は、1次で住居址が1軒、9次で遺物集中出土地点が2カ所、4次の東半部でも遺物が少量確認されている。古墳時代中期は4次で平田里1～3号古墳、7・8次では遺物集中出土地点が確認されているが、同時期の住居址は確認されていない。

古墳後期（第23図）になると1・10・11次を除く、ほぼ調査地点全域において住居址が確認されるようになり、出

川南遺跡に本格的な集落が展開する時期である。中でも4次では113軒の住居が確認され、一帯に大規模な集落が展開していることが明らかになっている。これらの調査成果から6世紀後半から7世紀後半までの4段階に分けることができる。1段階である6世紀後半は住居数も少なく、4次では古墳群の西・南側に4軒、5次で1軒確認されている。2段階である6世紀末～7世紀前半になると13軒以上と集落規模が拡大する。4次では流路によって区画された中央に集中し、西側にも広がる。分布の集中は中央北東寄りにある。3段階の7世紀中葉は前段階と同じ分布であるが、再び東側にも住居が分布する。住居軒数が18軒以上と増加傾向にあり、大型住居の周囲に小型住居が分布している。南側の調査区でも、12次で1軒、14次で1軒が確認されている。4段階の7世紀後半は4次で20軒以上と住居数が最も多く、調査区全域に広がる。また、5次で1軒、8次で3軒、12次で1軒、15次で2軒と南側の調査区にも住居が一定数分布する。

古墳時代後期を通して分布の中心は4次調査区にあるが、2段階から集落が発展し始め、4段階以降は南側に集落域が拡大している。

奈良時代(第24図)になると8次で8軒、12次で8軒、15次で4軒確認されており、7次でも住居が確認されている。4次調査地点では該期の住居址はなく、南に集落域が移動している。本遺跡の南側に位置する平田北遺跡でも該期の住居址がまとめて確認されており、これらが出川南遺跡の該期集落と一連のものであった可能性もある。

平安時代前期(第25図)は1次で1軒、4次で2軒、5次で5軒、7次で39軒、8次で14軒、10次で4軒、12次で2軒、15次で9軒が調査されている。奈良時代に比べると住居数は増加し、東側に移動しているようである。平田北遺跡でも住居址が6軒確認されているが、前時代ほどの遺構の集中はしていない。部分的な調査ではあるが、出川南遺跡同様集落域の移動が推測される。中期は11次で1軒確認されているのみで様相は不明である。後期も1次で2軒、4次で1軒、11次で1軒が確認されているが、集落の中心は北東に移動していると推測される。中世は1次・11次の東側の調査地点で遺物が出土しているが、11次のは溝出土である。また、11次では火葬施設が確認されており、JR篠ノ井線より東側には集落が広がる可能性がある。

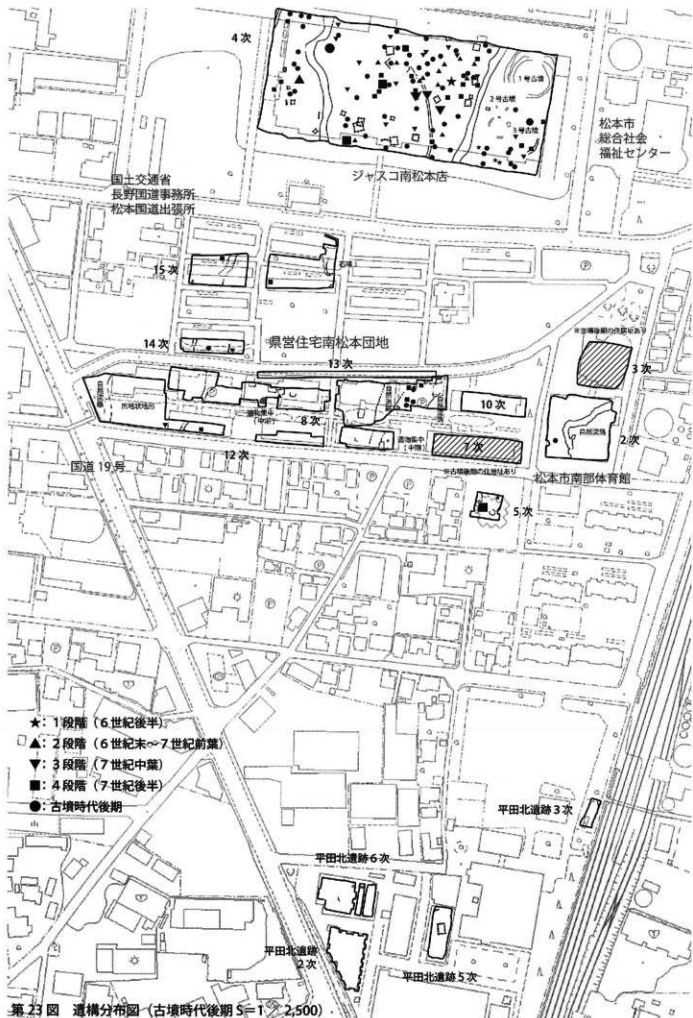
以上のように、古墳時代後期から平安時代前期までを中心に集落の展開を竪穴住居址の分布から推測した。本遺跡は洪水などの影響を受けやすかった土地であったことはこれまでの調査成果から明らかであり、集落域の移動と何らかの関係があったと考えられる。

また、本書作成中に第17次調査が実施されており、発掘調査・整理作業が進むにつれて集落の展開が明らかになっていくだろう。

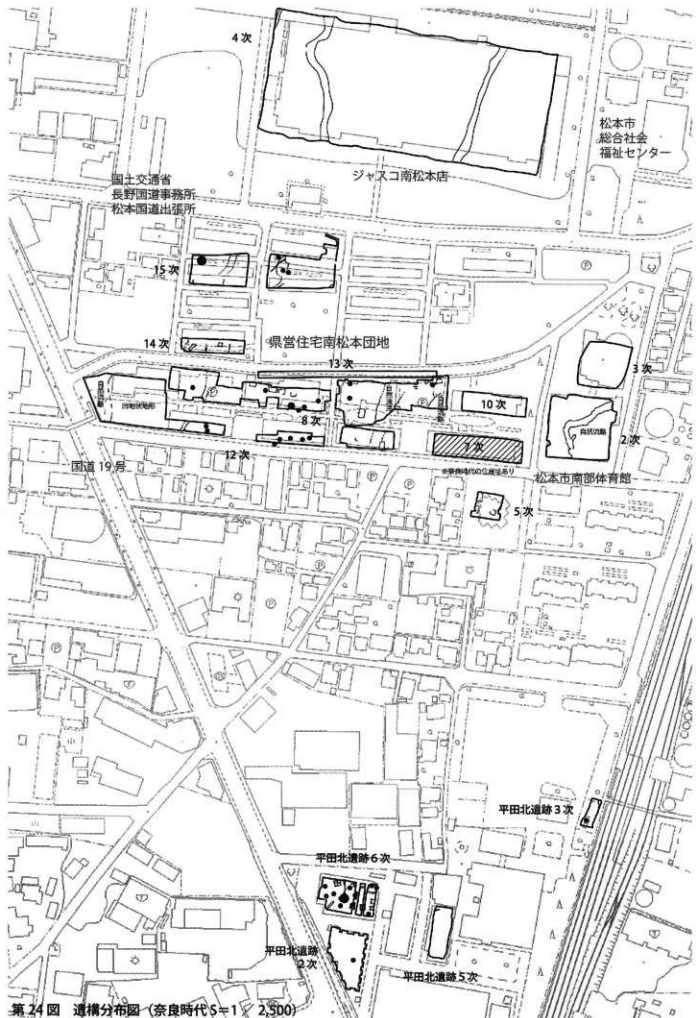
最後に本調査の実施に際して多大なるご協力を頂いた長野県住宅部の皆様、並びに県営住宅南松木団地をはじめ地元関係者の皆様に感謝の意を表して本書の締めくくりとしたい。

#### 関連報告書

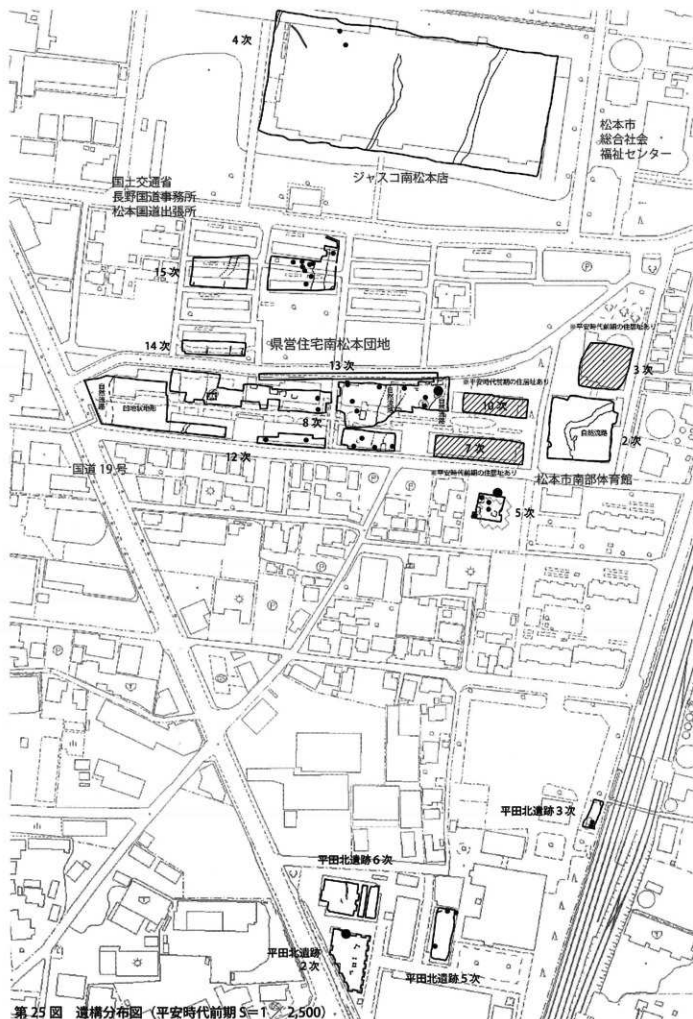
- 1 松本市教育委員会 1987『松本市文化財調査報告書№53 松本市出川南遺跡』
- 2 松本市教育委員会 1989『松本市文化財調査報告書№75 松本市出川南D道跡』
- 3 松本市教育委員会 1999『松本市文化財調査報告書№139 長野県松本市 出川南遺跡V』
- 4 松本市教育委員会 2000『松本市文化財調査報告書№147 長野県松本市 出川南遺跡VI』
- 5 松本市教育委員会 2000『松本市文化財調査報告書№157 長野県松本市 出川南遺跡VII』
- 6 松本市教育委員会 2000『松本市文化財調査報告書№148 長野県松本市 出川南遺跡IX』
- 7 松本市教育委員会 2002『松本市文化財調査報告書№161 長野県松本市 出川南遺跡11』
- 8 松本市教育委員会 2002『松本市文化財調査報告書№158 長野県松本市 出川南遺跡12』
- 9 松本市教育委員会 2009『松本市文化財調査報告書№198 長野県松本市 出川南遺跡 第14次発掘調査報告書一』



第 23 図 遺構分布図 (古墳時代後期 S=1 1/2,500)



第24図 遺構分布図(奈良時代S=1 2,500)



第25図 遺構分布図(平安時代前期S=1、2,500)



東区全景 完掘状況（西から）



東区 竪穴住居址分布状況（北東から）





西区全景 完掘状況  
(東から)



西区南半 完掘状況  
(北東から)



西区北半 完掘状況  
(南東から)

東区 竪穴住居址重複状況  
(南から)



362 住 遺物出土状況  
(北から)



373 住 遺物出土状況  
(南から)



写真図版 4



361 住 カマド 遺物出土状況 (西から)



362 住 カマド 遺物出土状況 (東から)



362 住 カマド 検出状況 (南から)



同左(東から)



363 住 遺物出土状況 (南から)



363 住 カマド・P3 礎出土状況 (西から)



364 住 遺物出土状況 (東から)



364 住 カマド 検出状況 (北から)



364 住 東カマド 完掘状況 (西から)



365 住 礎検出状況 (北から)



367 住 完掘状況 (北から)



367 住 カマド 遺物出土状況 (西から)



368 住 掘削状況 (北西から)



368 住 カマド 遺物出土状況 (南西から)



369 住 完掘状況 (東から)



369 住 遺物出土状況 (北から)

写真図版 6



369 住 カマド 遺物出土状況 (南から)



369 住 カマド 半掘 土層断面 (東から)



370 住 遺物出土状況 (西から)



370 住 土層断面 東区北壁



370 住 カマド 遺物出土状況 (北から)



370 住 カマド 完掘状況 (西から)



371 住 遺物出土状況 (東から)



372 住 カマド 検出状況 (西から)



372 住 カマド 掘削状況 (西から)



372 住 カマド 煙道 掘削状況 (西から)



372 住 カマド 煙道 礫検出状況 (北から)



373 住 遺物出土状況 (東から)



373 住 遺物出土状況 (北東から)



373 住 174 出土状況 (北から)



373 住 189 出土状況 (東から)



373 住 183 出土状況 (西から)

写真図版 8



373 住 190 出土状況 (南から)



373 住 193 出土状況 (北から)



373 住 完掘状況 (西から)



374 住 カマド 遺物出土状況 (東から)



24 土 233 出土状況 (南東から)



27 土 上層 遺物出土状況 (西から)



27 土 237 出土状況 (北から)



満3 238 出土状況 (南から)

溝1 完掘状況  
(北東から)



溝6 礫出土状況  
(南から)



溝6 土層断面 西西北壁







石積 検出状況 (南西から)



石積 検出状況 (北西から)



石積 検出状況 (北から)



石積 基底面状況 (北から)



石積 基底面 石列か (北から)



石積 断ち割り 石積状況 (北から)



石積 下層 土器出土状況 (南西から)



石積 断ち割り 土層断面 (北から)



石積 石列 検出状況 (東から)



石積 石列 立面 (西から)



東区北壁 土層断面



東区東壁 土層断面



石積・溝2 土層断面  
(北から)



373 住 出土遺物



6



21



23



24



25



29



61



71



71 墨書



73



95



108



36



37



71 刻字



48



116



133



134



190



191



192



193



88



112



123



124



125



181



183



186



188



189



1



11



12



39



40



41



42



46



78



79



96



99



100



161



163



167



172



173



174



175



233



234



56



130



137



49



50



106



149



236



237



142



52



83



85



54



119



68



105



135



220



153



257



102



67



103



152



148



91



92



215



138



258



90



57



214



58



70



107



59

# 報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし いでがわみなみいせき だい5じはつくつちようさほうこくしよ							
書名	長野県松本市 出川南遺跡 第15次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.207							
編著者名	石井佑樹、直井雅尚、福沢住典							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-0874 長野県松本市丸の内3番7号 TEL.0263-34-3000(代) (記録・資料保管:松本市立考古博物館 〒390-0823 松本市大字中山3738-1 TEL.0263-86-4710)							
発行年月日	2011(平成23)年3月31日 (平成22年度)							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
いでがわみなみ 出川南	ながのけんまつもとし 長野県松本市 丸の内3番7号 126、127、128	20202	177	36度 12分 26秒	137度 57分 52秒	H21.8.27 ～ H22.1.28	1838.8㎡	県営住宅 南松本団地 建設事業 (12号棟)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
出川南	集落跡	古墳 奈良 平安	<ul style="list-style-type: none"> <li>・竪穴住居址 15軒</li> <li>古墳時代後期:2軒</li> <li>奈良時代:4軒</li> <li>奈良末～平安時代前期:9軒</li> <li>・土坑 29基</li> <li>・ピット 39基</li> <li>・溝 8条</li> <li>うち自然流路5条</li> <li>・石積遺構 1基</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>【土器】</li> <li>土師器</li> <li>(古墳～平安)</li> <li>黒色土器</li> <li>須恵器</li> <li>軟質須恵器</li> <li>【石製品】</li> <li>凹・磨石</li> <li>砥石</li> <li>剥片</li> <li>【鉄製品】</li> <li>刀子</li> <li>ヤリガンナ</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・古墳時代後期～平安時代前期の集落址の一部を調査した。竪穴住居址が集中して分布し、掘立柱建物址は存在しない。また、1辺約8mの奈良時代の大形住居址を検出し、東海系の須恵器を多量に出土するなど、特異な性格が想定される。</li> <li>・石積遺構は性格を明らかにすることができなかったが、古墳時代前期の土師器が出土するなど、集落址とは異なる特殊な遺構の可能性がある。</li> </ul>	
要約	<p>・出川南遺跡は松本市街地南部の奈良井川と田川・牛伏川に挟まれた合流扇状地上に位置する。過去に14次にわたる発掘調査が行われており、古墳時代後期から平安時代にかけての比較的規模の大きな集落が営まれていたことがわかっている。また、遺跡範囲内には古墳時代中期後半の埴輪が伴う円墳3基がある。</p> <p>・今回の調査は県営住宅南松本団地12号棟建設事に伴う緊急発掘として実施された。発見された遺構の中心は竪穴住居址で、古墳時代後期2軒、奈良時代4軒、平安時代前期9軒の計15軒が、一部に重複を伴って存在した。古墳時代後期の住居址は7世紀後半と考えられ、北に近接する第4次調査地点でも住居数が最も多く、居住域も拡大する時期である。</p> <p>・奈良時代の住居址は東区の西半から西区にかけて分布する。中でも第373号住居址は大形住居址で、東海系の須恵器も含め多量の遺物が出土している。調査区内では周辺に同時期の住居址がなく、集落内での立地・性格は今後の周辺の調査を待ちたい。</p> <p>・平安時代前期は9軒と最も住居址が多く、集落が拡大する時期である。東区に重複するように集中し、居住域は東に移動するようである。</p> <p>・石積遺構はほぼ東西方向から南北方向に直角に曲がり、東西幅約8.8m以上、南北幅約13.0m以上である。東側は調査区外に続いているが、北側は攪乱されており全形は不明である。上部も攪乱・削平されていると考えられ、遺構の性格・時期を決定できる遺物などは発見できなかった。今後の周辺調査および類似資料の増加によって解明していく必要がある。</p>							



---

松本市文化財調査報告No.207  
長野県松本市  
出川南遺跡  
― 第15次発掘調査報告書 ―

発行日 平成23年3月31日  
発 行 松本市教育委員会  
〒390-0874  
長野県松本市丸の内3番7号  
印刷 株式会社 二光印刷

---

